建築ト社會

第六輯　第七号



ぎよりう

大正十二年七月一日

日本建築協會

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラントヲ希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ賛成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラムトスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ有ス

會員ハ會內ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優過及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失セルル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免カルヽコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會頭　一名

副會頭　一名

理事長　一名（理事長タル理事ヲ含ム）

理事　十名

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但會頭、副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主記　一名

二　主計　一名

三　編輯　三名

四　編輯補　若干名

五　書記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トス又ヨリ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員會ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トスルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要トト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル研究

十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十一　理想的建築ニ關スル有益ナル事項

十二　其他建築ニ關スル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別賛助員ハ特別賛助員年額金九圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助員年額金六圓本會ニ前納スベシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

第二十二條　本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十三條　本會ノ財產債權債務及每月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

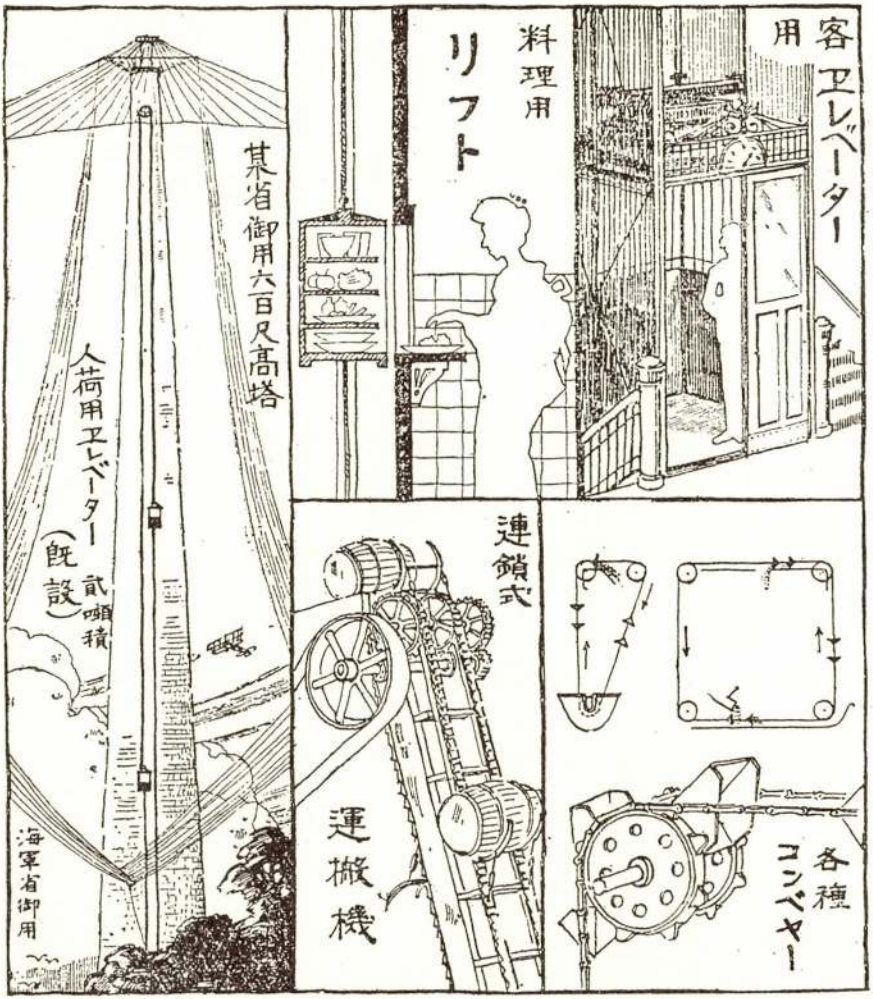
本會ノ財產債權債務及每年ノ收支ハ理事會ニ於テ決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十四條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十五條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

本邦エレベーターの権威

（専賣特許六件）



◎日本エレベーター製造株式會社

本社　大阪市東區中道川西町　電話東三二三六〇八七五番

出張所　東京市丸ノ内海上ビルヂング六階　電話丸ノ内二二一二番

◎製品營業　エレベーター、コンベヤー。エスカレーター其他　捲揚機械設計製作
リフト、ケーブルカー、ホイスト



建築と

第六輯

口繪　新築成れる堂島ビルデイング

〔巻頭〕

▼生活と住宅……

〔論說〕

▼建築界の大勢……日本建築協會副會頭・工學博士・片岡安・二

▼和風住宅と洋風住宅の長短……工學博士・中村琢次郎・一〇

▼住宅政策論(二)……楠原祖一郎・一六

——貧乏人と住宅問題の結論——

〔研究〕

▼製鐵雜話……工學博士　齋藤大吉　三

▼家相に對する疑問……葛野壯一郎・二九



社會

第七號目次

〔住　宅〕

▲電化されたる嵯峨野の新邸……郊　邨・三七

〔都　市〕

▼初めて見た倫敦(畢)……法學士・小川市太郎　四四

〔資　料〕

▼土地價と建築費より見たる家賃……一　記　者・五一

▼古代伊太利の都邑計畫……山　邑　弘・五六

——共和時代後期に於ける——

▼埃及旅行記……工學博士・八戸成蟲樓・六四

〔漫　錄〕

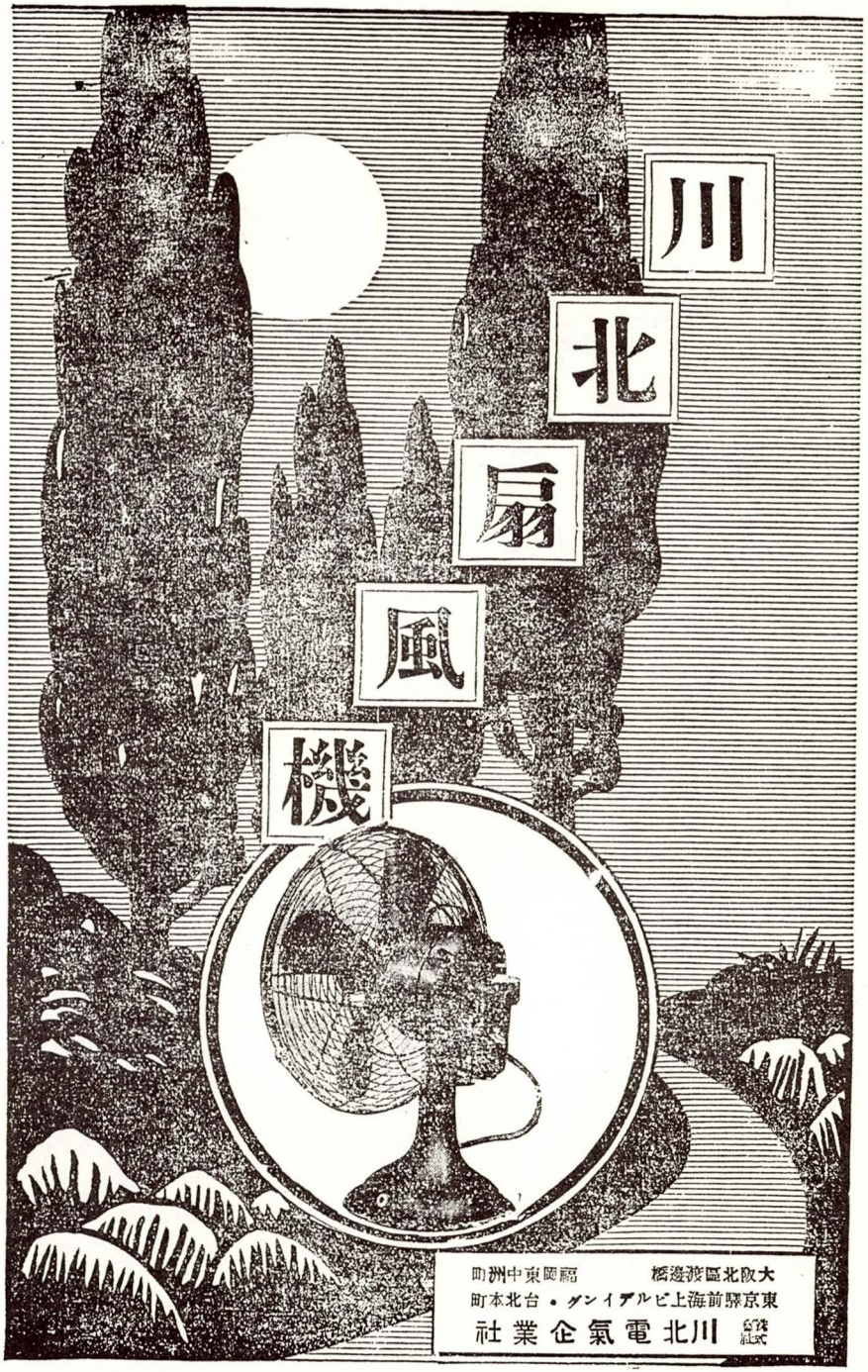
▼滿鮮紀行……波江　悌夫・七二

▼紐育市步羅都記……吉本　時介・七六

▼自然を背景とした住宅……某實業家夫人・小　百　合・八四

〔會　報〕

▼日本建築協會六月中記事


川北扇風機
大阪北區菱邊橋　福岡東中洲町
東京驛前海上ビルヂング・台北本町
株式會社 川北電氣企業

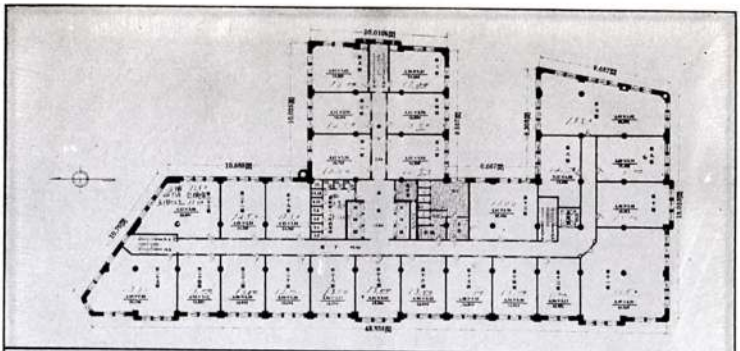


大阪堂島ビルデルィグン正面全景

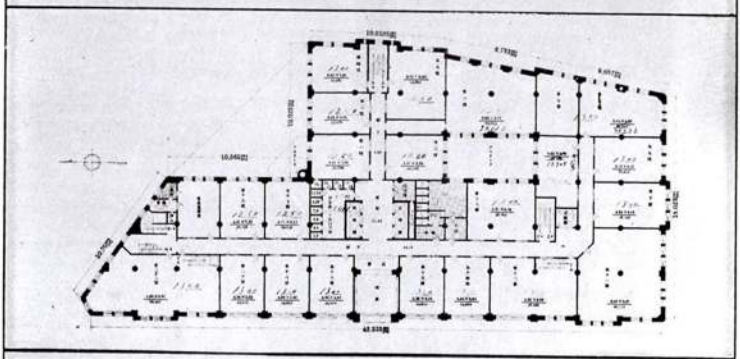
株式會社堂島ビルディング平面圖

大阪市北區大江橋北詰（各室内横線上ノ數字ハ間數ニシテ横線下ノ分ハ坪數ナリ）

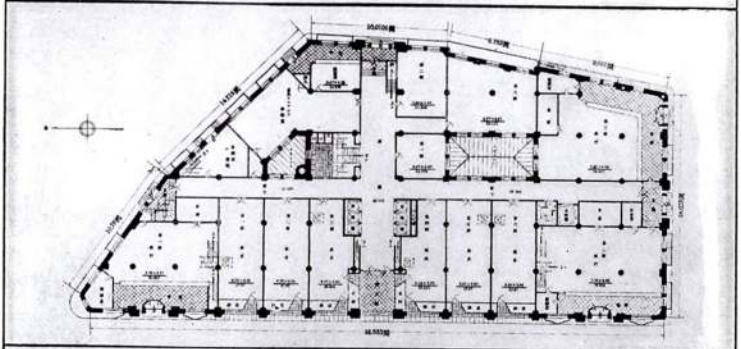
自第三階至第六階



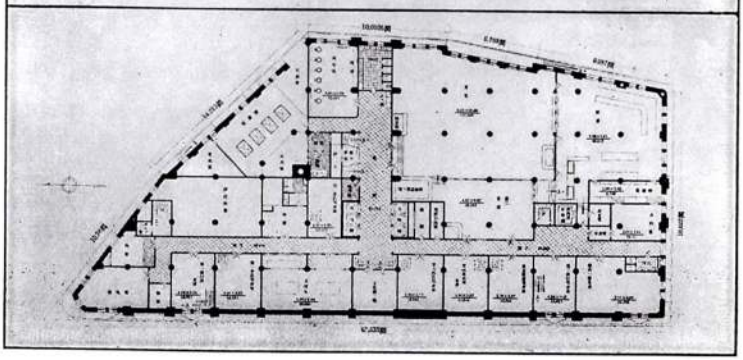
第二階

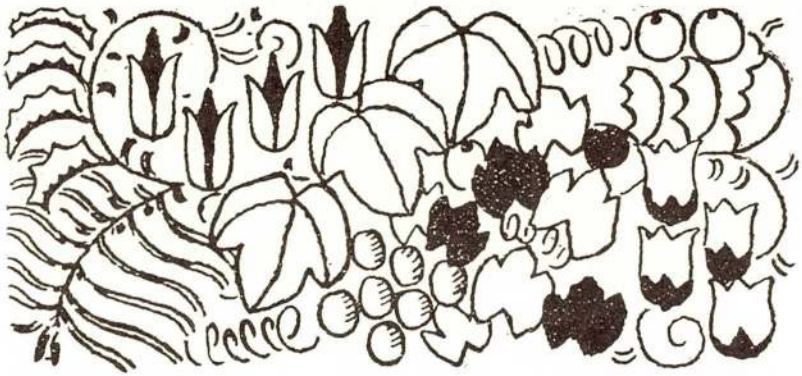


第一階



地下室

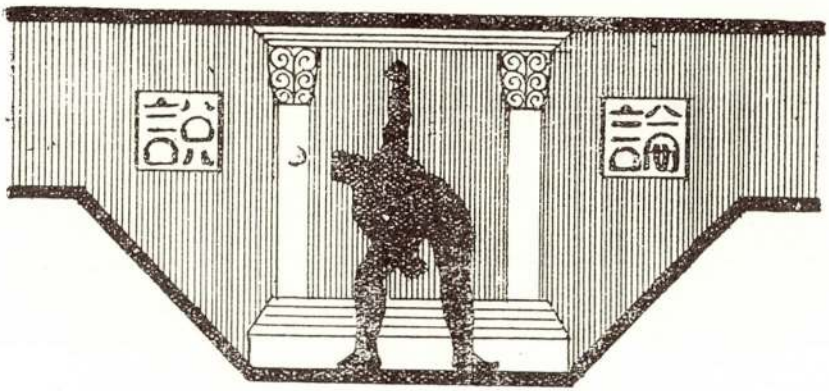




研究と生活

「眞理價値が純粋に意識され、そして人間が被の只なる活力的生命に意味を與へるために、價値の生活をすることを覺ゑるまでには、相當に長い時間が經過した。ギリシヤに於て初めて眞理が眞理のために尊重され、そして眞理を荷へる財たる學問が學問のために求められた。文化による純活力的生命の退嬰が其處に明瞭に現はれた。人は智識を生活の爲には何等か他の目的のために必要とするがためにのみ、之を探求した。最初は一般に斯る狀態であつた、そして今日なほ多くの人にあつては斯る狀態である。ギリシヤに於て初めて此の狀態が顚倒した。人間は其處に於ても最初は少數者ながら最早生活するために研究せずして、むしろ研究するために生活した。」

リッケルト（生の哲學）



建築界の大勢

日本建築協會副會頭　工學博士　片岡安

建築と云ふものは各民族、各時代に依つて非常な差があるのである。人も知る如く、西洋の建築と日本のそれとの間には非常な差がある。又西洋でも亞米利加邊の建築と、英吉利や佛蘭西、獨逸、或は露西亞と云ふやうな國々の建築との間には、甚だしき相違がある唯見た儘に於てさへもその相違のあるを容易に見分けられる。其内容に於ての相違は勿論の事であるが、是等のものを一概に論ずると云ふことは甚た難しいことである。併しながち、建築と云ふものは誰が使ふのであるかと云ふと、其建築の出來た時に其社會の人が使ふものが建築であるから、勿論畜類や獸類のような人間以外のものが使ふのでないから、其時代の文明に適當した所の内容を有つた家でなくてはならぬのである。故に、建築の大勢を知る、と云ふことは、文化の大勢を知ると云ふことゝ、全く平行して居るのである。歷史家は、『建築の大勢を知るには、藝術の歷史、其他學術發達の歷史を識り、社會の一般文化の推移を識ると云ふことが、即ち建築の大勢を知る所以である、斯う云ふ風に答へるのであらう。それも間違ひの無いことである。けれども、それでは餘りに空漠として

居つて、是れを以ては、建築の大勢を瞰氣にも想像することが出來得ないのである。斯る見解は、理論に於ては間違ひないやうであるが、それは、大勢を知ると云ふことの理窟だけであつて、知識を得ることが困難である。言葉を換へて云はゝ、建築と云ふものは、如何なる時代でも、其民族の政治、風俗、宗教、及土地の狀況、即ち氣候であるとか、產物であるとか、製造工業の狀態と云ふものに支配されるのであつて、それ以外に殆ど一歩も出ることの出來ない所のものである、斯う云ふことを歷史家も言ひ我々もさう信ずるのである。けれども、それは、即ち環境に支配されると云ふ言葉でも現し得るのである。もう一つ之を具體的に申さば、如何なる民族でも、其時代の文化が容すだけの最高の理想を以て建築と云ふものは出來るのであるから、建築の如何なる形であるか、と云ふことは、其文化の總てのものが綜合され、其處に產み出されて來たものが建築である、と考へて可いのである。

併し、私が今此處に述ぶるものは、斯樣に建築に對する抽象論を述ぶるのではなく、今少し具體的に建築の成行、殊に最近に於て如何に建築が甚しき變遷を受けつゝあるか、と云ふことを述べたいのである。

憶ふに、昔は、建築と云ふものは政治の力に依て實現したのである。又宗教の力に依て實現したのである。例へば、我國の平城京の出來た時分、或は維馬の『アクロポリス』が出來たと云ふやうな時分の建築は、凡て政治的權力の權化であつたのである　換言すれば、政治其ものが建築を拵えた、と觀ることも出來る。又宗教の力に依て建築が實現された遺跡は古今東西甚だ數が多い。卽ち、歐米各國に於ても雄大な建築と云へば、古來總て宗教の力に依て出來たものと考へても差支へない。

我國に於ても奈良、京都の大建築は殆ど宗教の勢力に依て完成したのである。最近には、兩本願寺の建物の如き、又天平時代の大佛殿の如き、遡つて推古時代の法隆寺の建築の如き、孰れも、宗教の信仰の結晶が、建築そのものに現はれて居る。

斯る次第であるが故に、今日に於て、建築と云ふものは、宗教の力に依て其實現を期待し得るか、と云ふに、實は并うでない。又政治の力に依て建築が實現するか、と云はゞ、是も先づ出來ないと申上けて可いのである。然らば、現代に於ては如何なるものが建築を造るか、建築實現の原動力は何であるかと云はゞ、それは實に經濟の力そのものである、と答へて可い。之を約言すれば、國民經濟の赴く所が即ち建築となるのであつて、經濟政策が如何に變らうとも、亦國民の政治狀態が如何に成り行ふとも、宗教が如何なる形に變遷しようとも、此經濟に依て建築の實現することの大潮流には、殆ど比較も出來ないやうな狀態である。

然らば、經濟の力とは何であるか、と云はゞ、是は今事新しく述ぶるまでもなく、現代の社會は凡て經濟を基礎として發動して居る、斯の現象が基礎となるのである。今日如何なる國でも、經濟力、即ち富の力に依て益々發展し、偉大なる國民となつて現はれ居るのであるから、約り、經濟が原則として認められて居る所の其流れに添ふて凡てのものが運ばれて居るのであるが故に、建築の如き非常な富を要し、多大な勞力に俟ち、夥多なる材料を要するやうな困難な仕事が、其潮流の趨く所に實現すると云ふやうな形になつて居るのは、別に怪むに足らぬのである。けれども、之を、古來建築が實現した所の其順序から稽へて見れば、實に非常な相違である。

其建築の內容に於ても、外觀に於ても、其影響を受けつゝあることは甚しいのであつて、之を如何なるものが助けて居るか、と云はば、それは、實に科學の進步に因るのである。即ち、科學應用と云ふことが盛になつた爲に、此建築の內容外形、設備、規模、其他建築を支配する凡てのものが、皆それに依て促進されて居るのである。之を具體的に述べて見れば、昔は權力者が自己の榮華を名實共に誇るがため建築が出來た場合もある。又宗教が信仰の結晶として大建築物を實現した場合もある。其澤山の事實を稽へて見れば。今日の經濟の潮流が造つて居る所の建築物は、其出發點に於て既に其趣を異にして居

るけれども、其内容及び外觀、設備等に於て甚しき相違が其處に生じて來るのである。

此建築の最近に變りつゝある所の趨勢は最も露骨に、最も甚しく現して居るのは、北米合衆國の都である。諸君が若し十九世紀の中葉から其以前の世界の建築を御覽になつたと假定すると、今日我々が歐米各國の建築の狀態を見るのとの差は、實に驚くべき距離がある。即ち、其差と經濟の流れに添ふて出來た所の建築が甚しく變つて居る、と云ふことの證據である。

亞米利加に於て、十九世紀の中頃から今日までに造つた所の建築なるものは、主として、只今述べたような經濟を基礎として出來た所の家であつて、其分量と其一戶の容積と、勞費の大なること、又設備に於て甚しく進歩したものであると云ふことは、近代文明の象徵と謂つて可い。其ものが、亞米利加に於て著しくあるに過ぎないのであつて、歐羅巴に於ても、亦我國に於ても、其傾向は少しも異らぬのである。唯、亞米利加の如き富力の張大なる、又經濟活力の雄偉なる國に於て、其傾向が偶々著しく現はれて居ると云ふことである、と私は考へる。

亞米利加では種々な建築を有つてゐるが、諸君が御覽になつて、最も著しい特徵として認められるのは、家の丈が高くなつたと云ふこと、通俗には摩天閣と稱へて居ります建築が都市の凡らゆる部分に澤山に出來たと云ふことである。從來の家は、二階とか三階とか云ふものであつたが、亞米利加では大概五階、十階、二十階——甚しきに至ると、五十階と云ふような家が出來て居る。是は亞米利加人が物好きでさう云ふ高い家を造つた位に觀る人もある。所が、實際はさうでない。亞米利加人は物好きで斯ういふものを造つたのではない。亞米利加人は經濟政策、經濟的の活動力に於て最も長じた國民であつて其建築と云ふものは、只今述べた所の經濟の潮流の最も流の疾い所に添ふて出來た建築物であるから、經濟の流れに添ふた家と云ふものは丈の高い家だとも言へる。是れは、特徵の一つであつて、經濟の流れに添ふた所の性質の全體ではない。唯特徵の一つであると云ふことを述べたのであるが、建物が高く

なると云ふことは、種々の弊害を伴ふのであるからして、歐羅巴の都市では可なり古い時分から丈の高い家を造ることを禁じて居つた。それは何故かといふに、或一人が高い家を造ると、近所の者が皆迷惑をする、共同の生活に於て自己が經濟上便利な家を造つても。近隣の者が迷惑すると云ふことでは困るから高さには嚴重な制限があるも、亞米利加は新開國であるから、其制限は甚だ緩かつたのである。家の高さ等に就いては制限がなかつたのであるから、經濟の命ずるが儘に高い家を造つたのである。所が、斯の特徴に就いては非常な利益あるも、それには前述のやうな弊害を伴ふから、亞米利加に於ても、今後は從來の如く無制限に高い家を造ることは禁じたのであつて、我國に於ても一昨年から無制限に家を高くすることは禁じたやうな譯である。即ち高さに就いては經濟上如何に利益であつても、或制限を加へなければならぬと云ふ時代になつたのである。けれども、其他のものに就いては、此經濟の原則に依て出來た家と云ふものは、約り、現代の文化を最も十分に利用する我々の生活が、經濟上に於て最も理想的に發揮されるやうに、家の內容、外觀、其他が出來て居ると云ふことが、現代の建築の特徴なんである。即ち、經濟の潮流に添ふて出來ると云ふのは、約り、我々が今日造らんと欲する所の家は、我々の生活が經濟的に最も理想的であるとする所の、其希望と一致しつゝあると云ふことを意味するのである

世の中の人は、此建築に就いて非常な誤解を存し居る場合が多い。丈の高い家を造つたり、大きな家を造つたり、或は最新式の家を造ると、洵に贅澤な、資本を浪費するやうに考へる人がある。けれどもそれは、非常な間違ひであつて、さう云ふ丈の高い、大きい、內容の充實した所の、科學應用を出來るだけ十分にやつた所の建築が、我々の生活を最も理想的に發動せしめる所のものである。斯ういふ理窟を十分に理解しない人が非常に多いのである、亞米利加の如き經濟活動力に對して凡ゆる利便を考へ、絶大な勇氣を出して其目的を達せんとする所の國民にあつては、相當に之を了解して、斯る建築を盛に建設して居るのである。英吉利の如き昔を非常に尊重し、從來の歷史に拘泥する所の國民でさへ、その

最近に造る所の家は、矢張り五階とか六階と云ふものを造るのである。從來は高くて三階四階と云ふやうな家を造つて居つたのであるが、近代は矢張り五階六階と云ふやうに、建築規則の許す限り丈の高い家を造つて、其内容に於ても科學を應用し、出來得るだけの利便を圖つて居るのである。又　我國に於ても、最近出來る所の家は、從來とは全く趣を異にして居つて、耐火耐震の、規則の許す限り丈の高い土地が容す限りの最大容積の、其内容に於ても、暖房、照明の裝置から、電話其他の通信機關の設備等凡ゆるものを利用する所の建築を、我々が歡迎するやうになつて來たのである。即ち、機關に於ても、世界の大勢に順應して、建築と云ふものは、經濟の原則に從ふて、是が實現を圖つて居るやうな譯である。

最後に、一言讀者の御參考までに申述べたいことは、亞米利加で最近どの位の金を建築に投じて居るか、即ちどの位な分量の建築を彼等が造つて居るか、と云ふことを申述べたい。

北米合衆國では、歐羅巴大戰前、日本で云はゞ、大正三四年時分は、建築に毎年十五六億の資金を投じて居つたのである。それが、戰爭中は、軍需品を造る方に勞働者、材料、資本と云ふものを極度に徵集せんが爲に、建築の新設を禁じたのである。政府では必要止むを得ざる、其家が無くては仕事が出來ないと云ふやうな程度の、必要の差迫つた建築の外は建設することを許さなかつたのである。其家が無くても營業が出來ると云ふやうな所は、もう少し待つて貰ひたいと云つて其建築を許可しない、と云ふ程、極度の制限を加へた結果、戰時中には、毎年八億乃至九億の建築をするに止ることが出來たのである。併しながら、大戰以後の亞米利加では、凡ての事業が混亂狀態に陷つて居つたにも拘はらず、此建築物の新設を禁じなくなつてから、建築をやつた分量は實に驚くべき數量に上つたのである。即ち、昨年一昨年邊り、一年に建築した分量は、平均三十億から五十億の間である。本年は少しく分量が減つたさうであるが、矢張り五十億圓内外の建築物を新設せんとして居るのである。此五十億なんと云ふ大量

の建築が何故に必要であるかと云ふことを考へることが、我々には非常な教訓である。

先き程述べたやうに、亞米利加では、決して無駄には家を造らない。家が出來れば、其建築に要した所の工費を十分に償へるやうに、即ち其建築に依て經濟活動が更に助長されると云ふやうな場合でなければ、建築をしないのであるが、毎年五十億圓に餘る所の建築を亞米利加合衆國が新設しつゝあると云ふことは、何を物語るであらうか。蓋し、彼等の社會が如何にも積極的で、生産事業に對して非常な努力をする、其經濟生活を助ける爲に最も利便なる所の方法如何と云ふことから打算して、五十億圓の投資が亞米利加人の經濟活動を助長するに必要なりと云ふので、毎年五十億圓の金を投じて、盛に建築を營んで居るのである。我國に於て、豊臣秀吉が大阪城を築いた、或は聖武天皇が東大寺を築かれたと云ふやうな不生産的なものではない。即ち經濟の潮流に添ふて出來る所の建築であつて、全く彼等の積極的の經濟活動力を助長するが爲に絶對必要なりとして建設して居るのである。建築に對する所の了解は、亞米利加國民を通じて最も能く行き亘つて居ると私は考へる。其建築の内容が如何に整備して居るか、それに依て如何に文化的の生活、文化的の活動が出來るかと云ふことを少しく考ふれば、我國に於て東京の丸の内、或は大阪の船場内に、參々伍々稍々經濟の潮流に添ふた所の建築が出來てゐるに過ぎずして、其速力の鈍さと云ふものを、我々は悲哀を以て迎へざるを得ないのである。矢張り土藏造の家であるとか、或は燐寸一本で翌日亡くなるやうな、さう云ふ建築物の中に甘んじて、國際的の經濟活動をやらんとして居る所の我國民の基礎的缺陷、近代の經濟生活と云ふ基礎に於て缺陷を有つて居る斯の態度は、或は亡國的態度であると私は考へるのである。今日の國際生活と云ふものは、經濟上に於て意味ある所の生活でなくてはならぬ。現代の文化に副ふた所の生活でなくてはならぬ。然るに、我國に於て偶々斯の現代の新しい建築が多少なりとも這入つて來て居るけれども、之に對する了解を餘りに少い讀者諸君は斯の道に就いて相當に御了解のある方々と思ふが、どうか我國民の建築物の建設が現代的に

行はれ、我々の經濟生活、文化生活を大に助長すると云ふ意味に於ては此ものが非常に必要である、と云ふやうな了解を諸君の周圍のお方に御宣傳あらんことを希望するのである。私共は、機會ある毎に斯の問題を種々のお方にお話をして居るのであるが、如何せん、我田引水のやうに思はれて、お前は建築をやつて居るから、建築の殖えることを歡ぶのである、商賣繁昌を喜ぶのであらうと云ふやうに考へる人がなか〳〵多いのでありますが、讀者の多くは必ずしも私共と同じき『コンデイッション』に居られる人でない、どうか斯う云ふ意味に於て御宣傳を願ひたいのである。（文責在記者＝郊郎）

ながめ入る人の瞳をうるませて

山明かにさす夕日かな

和風住宅と洋風住宅の長短

工學士　中村琢次郎

一

現在は總て世間の物事が混亂して居り、例へば、思想問題、社會問題、生活問題抔種々の問題がこんがらがつて居るが、就中、住宅の樣式と云ふやうなものも、全く混沌たる狀態にある。

十年ばかり前の我建築界に於ては、日本の建築の『スタイル』を如何にするか、と云ふことに就いては所謂和洋折衷樣式論を云ふものが論議されたことがある。併し、今日では、建築の樣式論の如き方面の研究をするやうな、そんな悠長な氣分に世間がなれないのであつて、今日はもつと〳〵我々の生活に直接關係した血の出るやうな切迫した問題、即ち生活の改善に伴ふて、住宅の改造と云ふ風なことが、我建築界では論議されつゝあるである。

仍で今日社會公衆的の建物、例へば公會堂の如き、又劇場の如き、銀行會社のやうな營業的の建物、或は學校病院と云ふやうな性質の建物は、總て洋風の建築になつて居るのである。唯、茲に、和洋何れかと云ふことを決し兼ねて居るのが、小商店と住宅である。併し、此小商店も洋風の建築で差支ない、其方が大變都合が好い、と云ふことには間違ひないのであるが、實は、個人的の經濟關係、又舊來の習慣に依つて、小商店は相變らず和風の建築が行はれて居るのである。

次いで、住宅を直ちに洋風の建築にしてはどうか、と云ふ問題であるが、住宅と云ふことになると、

日本人の昔からの習慣、疊の上に坐つて居ると云ふ生活、又木造の建物であると云ふ構造上の方面から今直ちに之を洋風に變へると云ふことは、頗る難しいやうである。

昨年日本建築協會が住宅改造博覽會を開催して、日本の住宅を、今日の我々の生活に適當したものに改造するのには、斯う云ふ風な樣式にやれば可い、と云ふようにその見本を造つて、世間に發表したのであるが、あの改造住宅を世間の人が見て、どう感じたか、成程能率增進、健康の上より、斯う云ふ風な建物に住んだ方が可からう、斯う一應同意はするのであるが、イザそれに住めるか、と云はゞ、實は決心し兼ねるのである。併し、我々の生活が段々と向上したならば、從來の儘では可けないと云ふことは明なことで、其中には、世間の人の覺醒と、又建築家の努力とに依つて、何とかその要求しつゝあるものに合致するやうな形式を見出すことになるであらう、と思ふのである。

洋風の可い所と和風の可い所を取合して折衷式を拵える、と云ふことも、寔に結構なことではあるが衣服の問題でも、洋服の經濟で自由であると云ふ長所を採つて改良服と云ふものを拵え、日本人に着せやうと掛かつたこともあるが、斯の折衷式の改良服と云ふ風なものは、餘り世間の好評を得なかつたやうで、今日は、女學校あたりでも、洋服を其儘制服にする、と云ふやうなことになつて來つゝある。住宅に於ても、亦折衷式に種々と齷齪することは、或は無駄骨になつて、洋風直寫と云ふ風なことになつて來はせぬかと思はれるのである。

次に、洋風と和風を種々比較して考へて見たいと思ふのであるが、斯の比較は、到底簡單に片附け兼ぬる種々の問題がこんがらがつて居るから、只今は、其比較的根本の問題であらうかと考へられることを、述べてみたい。

二

先づ、和風住宅と洋風住宅との根本的の相違は何であるかと云はゞ、それは申すまでもなく、坐る式と立つ式疊の式と椅子の式である。此の立つか、坐るか、孰れを採用するか、と云ふことが根本の問題になつて來る。坐ると云ふことは、我々の古い昔からの習慣であつて、殆ど本能に喰入つて居る位に、強大な因襲性を有つてゐるから、之を一朝一夕に廢すると云ふことは、なか〳〵思切りにくひのである併し、此坐ると云ふことが、果してさう捨て難い程可いものであるか、といふことを考へて見むか、子供の時から椅子の生活を全然しない人であれば、椅子の可い所を經驗したことがないから、全然椅子を否定するかも知れないが、どうも我々時代の人間は椅子の方へ手を擧げたいのである。公開の席上へ澤山の人が集つた場合、又旅行をして、ホテルなどへ泊つた場合、さう椅子に腰を掛けて居たが爲に疲れたと云ふ風なことはない。寧ろ、日本座敷に坐つて居る方が、餘程疲れる。或は夜分宴會があると云ふやうな時に、ホテルの食堂で腰を掛けて食事を爲て、一向疲れたと云ふ風なことはないが、日本座敷に一晩坐らされたと云ふ場合には、我々晝間椅子に腰掛けて居る者は非常に疲れる。誰にしても、自分の座席は床柱の前といふやうに箴が當つて、其處へ凭れることが出來ると云ふやうな時には、欣んで其席へ坐られるであらう。即ち、何かに凭れると云ふことは、非常に樂になれる。曾つて、私の經驗した例であるが日本軍が大正三年に靑島を占領しで、獨逸人の住んで居つた家屋を日本人の官舍に當てた其場合に、どうも壁が洋服に着いていけないと云ふ小言が出て、壁の胡粉を落し、『ペンキ』塗々は『ソーライト』塗と云ふやうなものに全部塗り變へたことである。それは、日本人は西洋館へ這入つても、直ぐ疊を敷いて、矢張り柱みたやうな氣持で壁へ凭れる、それが爲に獨逸人時代には胡粉に色を入れて赤だの靑だのに塗つてあつても、机や椅子で生活して居つたから、小言は出なかつたのである。日本人が住むと直ぐ小言が出る。どうも何かに寄掛からなければ工合が惡い、寄つ掛かると云ふことが樂である。即ち椅子は始終脊に柱や壁を負つて廻つて居るやうなものであるから、椅子式の方が樂である。

併し、又茲に和風建築に執着のあると云ふのは、強ち傳統的の習慣からばかりではない。それは、間取が共通的であつて、僅な部屋で以て種々に利用が出來得る。晝間は居間に使つて、夜はそれが寢室に成り、又三度々々の食堂にもなると云ふ風に、部屋が融通性を有つて居る。是は貧乏人には大變都合の好いことで、小さな部屋が自由に使へる。又、座敷が開放的であつて、庭との間に椽側と云ふ氣持の好いものがあつて、庭と家とを密接な關係に握手させて居る。日本人は自然に親しむ、土に親しむと云ふ風な野趣を愛する人種であるから、構造が自然的であると云ふことが、和風建築の特徴として可いと思ふのである。

然らば、洋風建築は其方面の好い所がないかと、いふに、洋風建築は、單に窓に依て外界と接して居るので、箱に入つたやうな窮屈な感じがする、と一概に思ふて居るやうであるが、併し、洋風建築には「ヴエランダー』と云ふ亦なく懷かしいものがある。是が西洋室と庭との間に和風建築の椽側の役目をなして居つて、『ヴエランダー』に絡る藤の蔓、藤の棚、又『ヴエランダー』に配置された草花の鉢植と云ふ風なもので以て、家と庭とを接近させて居る。尙ほ進んだ遣り方は、部屋の中に温室の一部を取入れて其中に草花なり又小さい木のやうなものを配置して、恰も庭が部屋の中へ喰ひ込んで來て、庭と部屋が接すると云ふよりは、寧ろ交叉して居ると云ふ所まで密接な關係を造つて居る。是等も、大變洋風建築としては、有難い方面であらうと思ふのである。

又、日本住宅は開放的であるが爲に、我々が晝間窮屈な忙しい生活に惱まされ、扨て家へ歸つて、着物を脫いで、一風呂浴びた上、椽側へ出て、庭へ水を打つて、涼しい風に涼を入れると云ふような極めて趣味に富むだ好いことである。

併し、西洋風の生活であると、冬の夜『ストーブ』の前に家族が寄集つて團欒を樂み、或は明るい書齋の窓の『カーテン』を通して來る柔い日映しの下に、靜に書見をするとか、又食堂の白い『テーブル』掛の

上に草花でも置いて、食前の祈を靜に捧げ、家族一同老幼が打揃つて晩餐を頂戴する、と云ふ風な、實に美しい樂しい家庭生活が出來得る。是等の生活は、日本人のまだ知らない新しい生活であつて、椅子式に依て得られる賜物である。

三

次に、日本住宅の庭園と、西洋住宅のそれとを比較して見れば、日本住宅の庭園は大自然を小さな庭の中に模倣する。其模倣も小さな住宅であれば、簡單なことであるが、紳士富豪の邸宅等に於ては、先づ立派な木を植えて、大きな石を擔いで來たり、大きな石燈籠を輓張て來て配置するとか、泉水に大きな鯉を放つと云ふ風なことをやる。成程、それ等は、主人の鑑賞味を滿足させるのには可いであらう。けれども、私は、それよりも、庭と云ふものは、家族の散歩をし運動をする爲のものである方が、其本來の目的に協ふものであらう、と思ふ。大きな石燈籠よりは、ブランコを置いて、子供に樂ませる方が可い。立派な枝ぶりの松の木よりは、滑り臺でも備へた方が可からう。大きな泉水よりは、砂場でも造つて、子供の危げなく遊べるやうに設備してやつた方が可い、と思ふのである。

又、日本住宅は開放的であるが爲に、外に高い塀を圍さなければならぬ。塀は盜難豫防、又道路から見透される爲の要愼に、日本住宅としての必要なのであらうが、西洋建築となれば、家其ものが城廓の如きものにかためられるから、塀の必要はない。殊に　別莊地のやうな所であれば、道路から美しい建物も見え　綺麗な庭も見える方が、全體としての都市の美しさを增すのであつて、如何に立派な建物があつても、高い塀で圍らしてありますれば、道路は恰も塀の間を通つて行くやうな無趣味なことになつてしまふ。

要するに、私の考へとしては、將來日本の新しい生活樣式に、疊を捨てゝ、椅子式に移ると云ふ方が生活の能率の增進、健康の保全と云ふ上からも可い。又、椅子式採用の結果、建物が西洋建築に成り、それが爲に庭が變化し、道路との關係も變つて、即ち社會生活が變化し向上して來ると云ふことになるであらうと思ふので、先づ椅子式の洋風建築に關扇を擧げたいと思ふのである。

薄き日は壁畵に匂ふなつかしき

慈眼にすがり泣かまくほしき

住宅政策論（二）

——貧乏人と住宅問題の結論——

楠原祖一郎

△本論文構成の諸項目

第一項　住宅の拂底と急造家屋
第二項　急造家屋の文化的價値
第三項　文化價値と貧乏人の住宅
第四項　急造家屋の防止と都市の住宅行政
第五項　結論

第三項　文化價値と貧乏人向住宅

古來貧乏人の住む家屋に、氣品よき家屋を發見するは中々困難なる問題である。（是の所にて云ふ貧乏人は貧乏線以下の貧乏人の事である）然し乍ら、貧乏人なるが故に氣品よき家屋に住み得ざるものではなく、只だ經濟上自己の慾望が是れに合致するを得ざる爲め、暫く陋屋に淋しく住むに過ぎざるもの〻て、思はゞ實に一種の淋しき心を誘致さるゝに至るものである。

さて斯くの如く貧乏人は文化的方面に遠ざかりつゝあるものゝ如けれども、果して文化的享樂は、貧乏人の味ひ得ざるものなるやと云ふに、決して然らざるものである。文化は貧乏人に非ざるものゝ特有物でもなく、又專有さるべきものでもない。貧乏人には貧乏人に相應しい文化と云ふものは存ずるもので今日の狀態に依つて見るに、生活苦に虐げられたものゝ其の精神的餘裕を此の方面に發見し得ざる

に依り、一般に非文化的生活を爲しつゝあるものゝ如く見ゆるものにて、是れを以て貧乏人には文化なしと云ふは、皮相なる早論であると解すべきものであるが、今吾等貧乏人の住みつゝある急造家屋の、非文化的方面を如何にして文化的に價値づけ得るや、本項に於て其の大體を述べんとするものである。

凡そ今日の社會に於ては物質的生活の内容が、余等生活内容の奈邊に迄及ぼされつゝあるやに依りて其の社會生活上の地位が大體に於て觀察さるものにて、其の地位を理解し、理解に基づく精神的方面の充實に依つて、文化生活の價値を發見するを得るもので、此理は其儘余等貧乏人の生活に應用し得るものである。日々衣食の資に窮し、稼ぐとも尚貧乏神に追はれつゝあるものに、其の物質的生活を理解したる程度に於て、其の精神的方面の充實を企り、自己の環境をして文化的色彩に富ましむる樣に希望するは、衣食の資に窮せざるものゝ忽ち想起さるべきものなれども、物質そのものに窮せる人々には さほど鋭敏に斯くの如き心理の勢起するものに非ざるは、靜かに考ふる人々の忽ち諒得する問題にて、予は如斯ものは自然其儘に放任する時は、決して文化價値を彼等自から發見するを得る樣、努力し得ざるものと解するが故に、彼等の生活内容その儘を文化的に價値づける方法を講ずる事の緊要なる事を 念ひ且つ信ずるものである。

然して此の政策を講じて以て、行ふは何人の責任なるやと云ふに、素より、公共團體の使命なるには相違なきも、予の見る所は、直ちに公共團體に向つて責任づけんとするものに非ずして、寧ろ公共團體の名に於て、貧乏人の生活そのものに直接關係を有する 一般社會の有産階級に對して、社會的文化の專有より、それを解放せん事を希望するものである。即ち換言すれば、公共團體は其の存在の使命に基づき、公共團體の名に於て、非文化的非藝術的、利潤搾取の容體たるに過ぎざる貧乏人集團の建設を阻止する運動を起す、事是れにして、貧乏人向の急造家屋の建設を阻止し、從來の過群生活を阻止するに非ざれば、貧乏人向住宅に文化の芽生を見出し得ざるものである。

青き草原に　赤きバンガローの小住宅の點々として、散在する所、鷄犬の其間に遊戯するは實に是れ一幅の畵、以て文化の概念のみにても發見するを得と雖も、狹少の地區に、然かも煤煙下に伏せたる城壁の如く、黄塵にまみれたる長屋住宅の生活に、文化の芽生を見出さんとするは甚だ困難なる事に屬するものにて、亦何人もおそらくは異議を挟まざるべしと信ずるものである。

世の大抵の人の云ふ所を聞くに、貧乏人の住む住宅とさへ云へば、下水の溢れ出でたる小路に、低き軒を並べたる何軒かの長屋を想像するも、如何にせん、現在の貧乏人向住宅は皆如斯ものなるが、是れ予の見る所に從へば、明かに是等の家屋を所有せるものゝ思ひを自己の利害に臻すも、他を顧みて益と爲す所を爲さゞる利己心の現れにて、予の如き、暫時足を留めて他を云ふ能はざるものである。

何軒かの長屋住宅の小路より、漏れ出づる薄き電燈の光に、其の内容を伺ふ時、永劫文化の境堀より離れたるものゝ如く見ゆるは、是れ其人の物質的生活に及ぼすべき物質の、不足なるに由るべしと雖も如斯住居を脱せざる限り尚ほより多く、物質の不足を告くるものにて、公共團體は、余等貧乏人の住宅に對する一つの政策として、住宅年齡簿を作成し、一定の期間を經過し、其家屋を建設するに要せし資金の回收を爲し經りたるものに對しては、是れに對し、現在居住しつゝある人々の經濟上の關係に相應し得る樣に公共團體の容認を得たる新家屋の建設又は改築を命じ、社會衛生上に可欠要素を具備せしむると共に、文化的要素の注入を講ずべきである。是れ即ち貧乏人向住宅と、文化的要素とを接觸せしめ得るものにて、人は『己れを殺して環境に從ふ』てふ超人傑士にてあれば　不合理なる環境には抗爭するを得るも、然らざるものは直ちに環境に支配さるゝものにて、往々にして節操なきものゝ、アブノーマルの行爲を演ずるものゝ、是れ此の理に從ふもの、『氏よりも育ち』なるべきか。住むによき家屋に居るもの、心自から清ふして、其の生活内容に文化的色彩を見出し得るものであらふ如く、家屋の人間心理に作用する所、蓋し鮮少ならざるものにて、特に、貧乏人に對しては然らんか。

第四項　急造家屋の防止と住宅行政

急造家屋の防止を爲す方法、實際には種々あらんも、是れに向つて、或る特定の權力を用ひて取締りを爲すもの、如斯は何等の効能あるものに非ずして、資本の横暴の前には、或る特定の權力の如きは、月の夜に於ける星の如く眞の光を放つ能はざるものである。

本問題に於ける先賢の士の説く所に依れば如斯急造家屋を防止する最良の手段として、公共團體自からが、相違なきも、予の考ふる所では、此の手段は直接には何等の効果あるものに非ずして、否却へつて他の競爭を受くる虞れあるものである。公共團體の經營する住宅は、他のそれに比し、優良なるものには相違なきも、然かも此くの如き經營は、其の都市に於ける多數市民の凡べての希望を滿し得るものに非ず、只一部の人々の滿足を購ひ得るに留まり、公共團體の財力を以てしては、無制限に經營し能はざるものなるが故に、他の私人の資本の前には無制限に年を延はし得るものと、自から其の趣きを一にするを得ざるべきに依り、予は是の方法に依つては、急造家屋を防止する能はざるを信ずるものである

予の考ふる所に依れば、投機的住宅建設を爲すものに對して加ふる政策の、永久にして且つ尤も有効なるべきは、即ち稅制政策なりと信ずるものである。由來各都市即ち公共團體にては、家屋に對して零碎なる租稅を賦課するものにて、是れを戸數割又は家屋稅として賦課しつゝあるものであるが、余の今論せんとするは、家屋稅として、家屋所有者に對して賦課せんとするものにして、是の稅制は急造家屋を防止するに尤も有効なる作用を爲すものと信ずるものである。戸數割なる名に於て、賦課せらるゝものは、家屋所有者に非ざるものにも及ぼさるべきものにて、如斯は下に薄く、上に厚きを以て社會政策的見地に合致したるものなれども、家屋稅は其の反對なるを以て至當と信ずるものであるが、何故となれば、從來家屋稅なるものは普通多數賦課階級に分れ、其の賦課さるべき容體の階級に依つて、賦課率

も甚しく相違すべきものにて、大體には其の家屋の構造の如何に依つて、其の賦課率を決定するものなるが故に、從つて其の結果に於て上に厚く下に薄きものとなつてゐるのである。然し乍ら予の考ふる所では狹少なる家屋には賦課率を低くし、廣大なるものは、其の負擔に耐ふるものと認めて賦課率を高くすべしとする、普通一般の見解と甚しく相違するものにて、其の反對の甚しからん事を希望するものである。即ち最上級を除き、比較的上級に屬するものに對しては薄くして、下特に投機的急造家屋には尤も厚く、中には尤も薄く賦課率を決定せん事を希望するものである、予の此の言に對して誤解の傳ふ事あるべきを豫期し、一應其の理を辯明せんに、最下級の急造家屋に對する家屋稅賦課率は普通には極めて薄きを以て、此種の家屋所有者には、家屋稅に依る壓迫を感ずる事寧ろ甚だ少かるべきものなれば、投機的に利を占めんが爲め、機に際して急造家屋の建設を爲すもの多きを加へんも、公共團體は素より急造家屋を防止する意味にて賦課しつゝあらざるより、賦課率の低きを好機として、社會的乃至は文化的價値を有せざる、狹少なる住宅の建設を爲すものにして、隨つて上級にして文化的價値を有する家屋の賦課率は結果に於て、相當多額となるより是等の住宅の新設は餘りに行はれず、中流住宅も結果に於て前者と異らずされば予は社會的價値を充分有する家屋に對しては、家屋稅賦課率を低下せしめて以て是れが新設を奬勵し、下級狹少なるものに對しては比較的高率の賦課を斷行して其の建設を阻止する稅制方面の手段を採る半面に於て、更らに都市の講ずべき住宅行政として、中流の所謂、無產智識階級に對する住宅供給として、有力なる民間公益團體と、都市契約を結び、其の契約の下に是れが經營を委託し、細民住宅の經營は公共團體自からが新たに經營する事を以て、尤も當を得たるものと信ずる。最上級の家屋の如き今予の取扱ふ問題外にて又公共團體もそれには關與する必要を有せざるものである。只だ予の重ねて云はんとする所は、投機的家屋の建設を防止する公共團體の努力を云爲するに留まり、他を顧みて言ふものに非ず。

第六項　結　論

予は本誌三號に亘りて貧乏人と住宅問題に就き、予の考ふる所を述べて已に茲に至る。此の編を通じて表完せる予の雜文の、如何に内容づけ得たるかを顧みる時、自から恥づべきものありと雖も、乃は暫く筆を擱かんとするものである。

結論として贅言を附言し、本論をお讀み下されたる讀者に對し其の勞を謝したいと思ふ。

惟ふに住宅問題は今後吾が社會に於ける有力なる實際問題として、今後も心ある人々に依りて盛んに論議さるべしと雖も、這は即ち其の形を變へて時代と共に論ぜらるべきものにて、決して予は住宅問題なるものは、適當なる時機に、適當なる範圍に於て解決し得ざるものなる事を信ずるものである——社會組織が今日の儘持續すべしと假定して——素より今日の住宅問題は、相當の考究を費されたる後住宅問題緩和の期を見るを得べし。されども其の緩和の時期には又第二の住宅問題を見るものなるが故に、更らに思ひをそれに及ぼさざるを得ず。是れその徹底的の解決を見たるものに非ず、かくして第三第四の住宅問題生ずべし。明治時代の住宅問題と大正時代のそれとは、蓋し同じからずして、大正時代のそれと、今後のそれとは、又色彩、程度、範圍等に於て甚しく相違すべく、其時其社會に於ける對策も自から異るべしと雖も、予の前項に於て贅言せし、稅制政策を以て基礎としたる住宅問題は、社會が如何に移變を告ぐるも、其の適用の範圍に變異を見ざるものなる事を確信するものにて、又尤も妥當にして比較的効力の大なるものと見るべきものがある。

只だ要は、貧乏人階級に對して文化的にして、且尤も有意義なる生活を送らしむるに便益多き住宅をより多く、より廣く供給し、居宅の安定を企圖し、以て思想生活にも、生彩あるものたらしめん事を慮ふものである。（畢）



製鐵雜話

京都帝國大學
工學部教授　工學博士　齋藤大吉

緒言

此間日本建築協會の江村郊部氏が態々私の所へ見へて同誌が日頃のモットとして居る都市計畫或は住宅問題に就て何か書けとの御話であつたが、私は以上の二問題に就ては全く門外漢であるから如何に腦味噌を搾つても、諸君の前に發表し得る程の名論は迚も出そうな筈がない。然し止むなく何か書くと申上げた以上、その約を果さなくてはならぬから、例によつて鐵の話でも持出そうと思ふ。

申すまでもなく、鐵材は工業の主要材料であつて、同時に近代建築の骨子となるものであるから讀者諸君も常識的に鐵材に關する智識を有せらるゝことが必要であると信ずる、殊に目下本邦製鐵界の不況を嘆ずる折柄二、三の問題に就て書いて見ようと思ふ。

世界に於ける鐵鑛の分布　米國の地質學者エフダブルユー、クラークは數多の岩石を分析して、

海水及空氣を含む、我地球の地殻は次の平均成分を有すると謂つて居る。

酸素五〇・〇〇　硅素二六・〇〇　アルミニユーム七・四五　鐵四・二〇　カルシユーム三・二五　マグネシユーム二・三五　ナトリユーム二・四〇　カリユーム二・三五　水素〇・九〇　チタニユーム〇・三〇　炭素〇・二〇　鹽素〇・一七五　燐〇・〇八　滿俺〇・〇七　硫黄〇・〇六　バリユーム〇・〇三　窒素〇・〇二　弗素〇・〇三　クローム〇・〇一　ニッケル〇・〇〇五

此他尙ほ多數の元素が一層少なる量に於て存在すると云ふことである。

此れに依て視ると現今我々の使用する金屬の內でアルミニユームの七・五%が最高であるが、之れは多く硅素礬土として存在して居るから其採收は容易でない、然るに第二位にある鐵は酸化物の形で、世界の各所に密集するものが多いから、其採收が容易である、之れ鐵が過去一千有餘年間我金屬材料界に其覇を唱ふる所以である、然らば現在の冶金學進歩の程度で我々の利用し得る鐵鑛が全世界に略々幾許あるかの問題は夙に學者間の懸案となつて居たのであるが去る一九一一年瑞典ストツクホルムに開かれた、第十一回萬國地質學會へ各國の地質學者が調査の結果を持寄つて纏めた結果其當時の鐵鑛實在量に(直に利用し得るもの)が約二百二十四億噸(鐵として約百億噸)で潛在量(成分貧弱或は交通不便等の爲め將來利用の望あるもの)が約千二百三十四億噸以上となつて居る、然るに其後一層詳しく調査された結果十餘年後の今日では全世界の實在量が約三百二十五億噸(鐵として約百五十億噸)潛在量が約一千億噸であると謂はれて居る。

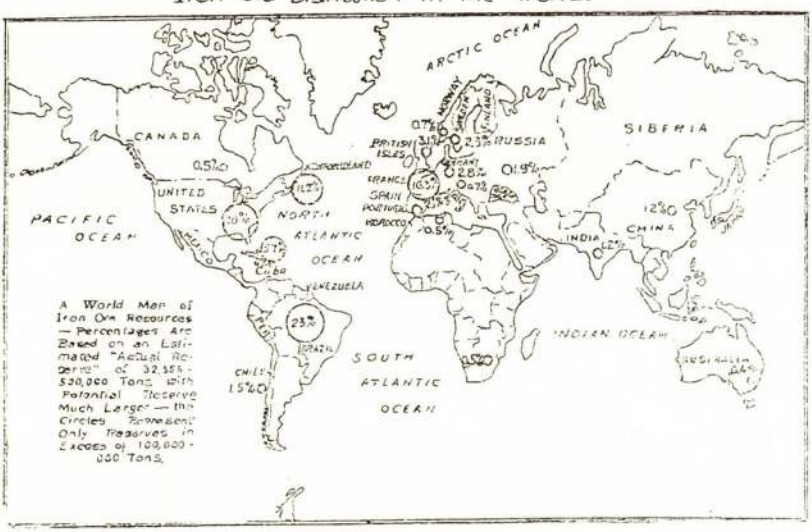
然るに近時全世界一ヶ年の鐵產額は、戰前一九一三年の六千五百萬噸が今迄のレコードで昨一九二二年は四千四百萬噸に減じて居るが之れは一時的の現象であるとして、今後戰前の割合で、年々其產額を增加するものとせば二十年毎に約二倍になつて居るから前述の實在量は、今後約七十五年を支ふるに過ぎぬ譯である。斯く論し來れば、鐵の將來は甚だ悲觀すべき樣にも見へるが、今後交

通の發達、技術の進歩と相待つて、千億餘噸の潜在量を充分利用し得るに至れば、其後數に百年以上を支ふることが出來る譯であるから鐵時代は、今後二百年位は續くものと考へて差支はあるまい、其後は冶金術の進歩と共に地設の含有量に於て第一位を占むるアルミニユーム金屬の時代が來るであらう。現に人類が立體的に空中に向つて發展し初めたる今日、唯一の要具たる飛行機、飛行船の材料には盛にアルミニユーム合金を使用して居る彼のデユラルミンの如きは抗張力一平方吋二十五噸、伸長率二〇%以上を有し優に軟鋼の物理的性質に匹敵して居る。

然らば、此三百二十五億噸の實在量が如何に世界中に分布されて居るかと謂ふに次表及附圖に示すが如きものである。

實在量潜在量鐵分實在量の割合

歐洲			
英國	一、〇二五、二百萬噸	四、六五五、五百萬噸	二五—五〇 三、一
諾威	二三七、七	八〇八、一	三五—六八 〇、七
瑞典	七四九、〇	一、二二九、四	四〇—六二 二、三
獨逸	七二五、八	二、八五一、三	三五—五〇 二、八
佛蘭西	五三八、五	四、〇九〇、〇	二五—四〇 一六、三
西班牙	六七八、五	三七三、〇	五〇—六〇 二、一
魯西亞	六二九、五	九八五、〇	四〇—六〇 一、九
其他	……	……	……
計	一〇、〇〇五、五	一五、七八五、二	
亞弗利加	二五〇、〇	？	五〇—六二 〇、五
濠洲	一三六、〇	？	五〇—六八 〇、四
北米洲			
ニュファウンドランド	三、六三五、〇	？	四八、五七 一、三
加奈陀	一五〇、〇	？	四六—六〇 〇、五
合衆國	六、五〇〇、〇	七〇、〇〇〇、〇	二五—六九 二〇、〇
キユバ	三、一五〇、〇	二三、〇〇〇、〇	四〇—五〇 九、〇
其他	……	……	……
計	一三、三四〇、〇	八二、〇〇〇、〇	
南米洲			
ブラジル	七、五〇〇、〇	？	六〇—七〇 一三、七
チリ及ペチヤユラ	五、〇〇〇、〇	？	六五—六八 一、五
計	八、〇〇〇、〇		



亞細亞

東印度　四〇〇・〇　？　六四―六九　一・二

支那　四〇〇・〇　百萬噸　？　六〇―六二　一・二

世界總額　三、五五五・五　一〇〇、〇〇〇・〇　百萬噸　以上

之れに依て視ると世界中で、最大の實在量を有するは南米ブラヂルの七十五億噸で、鑛石の性質も極めて優良である、次は合衆國の六十五億噸で、之れは目下盛に開發され、一九一三年の如きは七千六百萬噸を採掘して居る、第三位は佛蘭西の五十三億噸で之れは主にローレイン洲にあつて、大戰後獨逸から約二十億噸を奪還して歐洲第一の鐵鑛國となつたのである、其他ニューファウンドランドの三十六億噸、キユバの三十一億噸が主なるもので以上の五ヶ國で合計二百六十億噸の實在量を有し世界全量の八〇・三%を有して居る、尙ほ其分布の狀態を地圖に依つて見ると、鐵の大鑛床は主として南北亞米利加の東岸及歐洲の西岸にある即ち南北大西洋を抱いて多く偏在して居る樣で、大平洋岸には至つて稀少である、我邦の如きは大平洋との孤島である關係上其量は御話にならぬ程

貧弱である、次に亞細亞の鐵鑛實在量に就て一言するが、前表にある通り、其量は實に少いものである。即ち印度及支那の各四億噸が主なるものであるが、兩國とも其地質調査が交通便利なる一部分に限られて居るから將來大に增大する希望がある。殊に支那では楊子江沿岸の湖北、安徽兩省及北方の直隸省丈けで此位の量はあるから交通の發達と共に其量は非常に增加するものと考へて差支はない、唯本邦は其地質調査が相當詳しく行はれて居るに拘らず、其實在量が極めて少い、即ち釜石の約二千萬噸を最大として四、五百萬噸以下の小鑛床が數個所に散在するに過ぎずして、是等を皆併せても一億噸には達しまいと思はれる。又朝鮮に於ても咸鏡北道を除くの外矢張り二、三百萬噸づゝものが數個所にあるに過ぎないから、本邦の製鐵原料はどうしても支那及滿洲等に仰ぐの外はない譯である。

滿洲及朝鮮に於ける貧鐵鑛と其處理　以上述べ來りたるが如く、我勢力範圍内の鐵鑛量は到底我邦の製鐵業をまかなつて行くに不充分であるが、數年前より滿鮮に相當量の貧鐵鑛を發見した、今其分布及概量に就て一言すること滿洲の西の方では山海關附近に現はれ、夫れから鞍山站附近の大孤山、鞍山及櫻桃園等に出で更に東の方では遼陽に遠からざる、楊木溝、茨兒溝、弓張嶺附近に現はれ夫れから東北に行つて本溪湖の廟兒溝更に東に飛んでは朝鮮咸鏡北道豆滿江沿岸の茂山に現はれて居る、而して其多くは貧鋼鑛で三五%内外の鐵分を含み此盡では到底製鑛に使用することは出來ない、今其鐵量を擧げて見ると左の如くである。

鞍山附近	一五〇百萬噸
弓張嶺附近	四〇〇
本溪湖附近	二〇〇
朝鮮茂山	四〇〇（富鑛の部分多し）
計	一、一五〇百萬噸

即ち約十一億五千萬噸あるから、今其平均品位を三五%として其八〇%を採收し得るとするも、約三億二千萬噸の鐵材を得る譯であるから、此貧鐵鑛の處理は本邦製鐵業の將來に多大の關係を有するものである。偖て此種の貧鐵鑛を選鑛して高品

位のものにすることに就ては瑞典及諾威に於ては既に十數年前より實行され由つて得たる富鑛を盛に獨、英等に輸出して居る、又鑛鐵に豐富なる米國に於ても夙に紐育洲及ニュージャーシー洲等に之を行ひ最近にはミネソタ洲の湖岸地方に於ても莫大なる貧鐵鑛に之を應用して相當の成績を收めて居る。

夫れで滿洲の本溪湖では大戰中低燐銑を造るの目的でグレンダール式磁力選鑛機及燒結爐を以て此貧鑛を處理し製鐵を行つて居たが、今は其事業を中止して居る。次に數年前數千萬圓の巨資を投じて創業した、鞍山製鐵所はその富鑛量が最早一兩年を支ふるに足らぬ爲め二、三年前から貧鑛の處理を研究し始めたのである、所で滿鮮の鐵鑛は磁鐵鑛の外に多量の赤鐵鑛を含むで居るから、之を其儘磁力選鑛にかけると多量の鐵分を失ふ恐がある、又此鑛石と非常に細く密雜する爲め高品位のものを得るには大變細く之を粉碎する必要がある、此等の事實は外國のものに比して著しく困難を感ずる點である。即ち鞍山の鐵鑛を處理するには還元熔燒(赤鐵鑛を磁鐵鑛に變する爲め)粉碎、磁力、選鑛及び燒結と四段の手數を要し、瑞、米のものに比し還元熔燒だけ餘計の手數を要するのである。然るに同所の工學士梅根常三郎氏を主幹とする研究課では多年研究の結果、遂に總計費八圓五十錢內外(還元燃料費をも含む)で品位六一%の鐵鑛一噸を得ることに成功した樣である。尙ほ之れは將來規模の擴大と技術の熟練とに由つて一層廉價に出來る望がある、此事實は單に、滿鐵の製鐵所に對する一大福音たるのみならず、本邦の製鐵業に對する一大警鐘である、之れ卽ち前に述べた滿鮮にある十一億餘噸の貧鐵鑛處理に關する鍵鑰であるばかりでなく、青森、岩手、兩縣に二三億噸存在すると稱せらるゝ砂鐵鑛の利用に關して一のヒントを與へるからである、此意味に於て私は滿鐵の此國家的研究の成功を祝し、同社製鐵業の將來を祝福せざるを得ないのである。

然らば前記滿鐵の鐵分六一%の鐵鑛一噸八圓五十錢が世界主要製鐵國の夫れに比し、果して如何なる比例を保つかと謂ふに、本年二月米國のピー

エム、タイラー氏が同國アイアン、エーヂ誌上に歐米に於ける銑鐵生産費を比較せるものゝ內、銑鐵一噸を得る爲めの鑛石費を滿鐵の夫れと對照すると次の如くである。

米國一九円〇　英國一九・四〇　佛國ローレイン四・五〇　白耳義九・五〇　鞍山一四・〇（六一%の鐵鑛を八四五十錢として計算す）

之れに由つて見ると鞍山の鑛石費は英、米の夫れに比して遙に廉であることが分る。

終りに私は本邦の製鐵業と、鐵材需給の關係等に就て述べて見たいと思ふが、餘り長くなるから止めます、然し茲に一言したいと思ふのは世間或を海を隔てゝ支那或は滿鮮から、鑛石は輸入するの危險を說くものがあるが一朝有事の時に於ては成程危險であるが、之は鐵鑛に乏しき我國としては致方がない、然し斯かる例は外國にも珍しくない例へば世界第二の製鐵國たる英國に於ては、戰前一九一三年の統計に據ると同年中千六百萬噸（其含鐵五百十萬噸）國內より採り西班牙及瑞典等より七百五十萬噸（其含鐵五百萬噸）を輸入して約一千萬噸の銑鐵を造つて居る、即ち、其鐵の二分の一は外國產である、又獨逸は同年三千六百萬噸（三五%の鐵鑛として其含鐵約千二百萬噸）を國內から採り千百五十萬噸（六〇%の鐵鑛七百萬噸）を外國より輸入して千九百萬噸の銑鐵を造つて居る即ち三七%弱の鐵は外國から來て居る、又戰後の獨逸に至つては其一層甚しきものがある、即ち、昨年同國の採掘した鐵鑛量は約六百五十萬噸（其含鐵約二百卅萬噸）で銑鐵の產額は六百二十萬噸であるから其差額約四百萬噸の鐵に對する鑛石（約六百五十萬噸が外國から輸入されて居る譯である、又戰前約二百五十萬噸の銑鐵を產せし白耳義の鐵鑛の殆ど全部はルツクセンブルヒ或は佛國から輸入したものである、斯く觀し來れば我邦が支那或は滿洲から鐵鑛を輸入して製鐵業を興しても何も不思議はない譯である。願れば戰時中本邦に勃興した幾多の製鐵所中其多くは近時の不況に沈淪し、或は、全く立腐れの浮目を見るものも少からぬ樣である。其當時極力之を奬勵した政府及び國民も又之れに共鳴して、巨資を投じたる資本家も一致協力して一日も早く本邦製鑛業に對する國策を樹立して、工業の主材、建築物の骨子たる鐵材の自給を完ふすることが目下の急務であると信ずるのである。（完）

家相に對する疑問

葛野壯一郎

家相と云ふことに就きまして、私が多少今までに考へて居ります所感の二三を申上げたいと思ひます。

住宅を建築する時に方りまして、何時も問題になりますのは、家相の善いとか悪いとか云ふことでありまして、立派な建築家が其製圖室で非常に頭を使つて作られた完全な『プラン』でも、注文者の所へ持つて參りますと、矢張り家相が悪いと云ふやうなことで屢々それに異見が入つたり、或は又其『プラン』と更に所謂家相屋さんの所へ持つて行つて、其立派な判を捺したものを貰つて來ないとどうも實施すると云ふことにならない、斯う云ふことが隨分世の中に行はれて居るのでありまして、千九百二十三年、大正十二年の今日に左樣なことが此日本に行はれる筈はなからうと思ふのでありますが、實際はそれと反對でありまして、矢張りさう云ふことを私共は屢々經驗するのでありまして無論それ等の人達と雖、全然さう云ふことをば信じておやりになる譯ではないらしい、併しながら又決して信じて居らぬと云ふ譯でもなく、兎に角人間の運命と申しますか、人の運命の開展とか、或は沈滯すると云ふ此世の中の色々の事實は唯單に道理だけではいかない、何か知らぬが其住んで居る家などにも何か其處に神秘的な關係があつて、さう云ふやうな結果になるのではないかと云ふ、幾らか心の奥底に懸念がある、そんなことから兎に角家相を觀て貰はうぢやないかと云ふことになる場合が隨分あるのでありまして、中には又それ程のことでもないが、マヽ昔から悪いと云ふて居るから、人の悪いと云ふことは避けて置く方が

宜しからう、兎に角家相屋さんの云ふ通り直して下さいと云つたやうな譯で、洵に不徹底な、何等立派な據所はないのでありますが、實は左樣な方が殆ど大部分で、私共は屢々さう云ふお方をばお見受けするのであります。

從つて人間として此世の中に居る以上は、御同樣に慾望の無いと云ふ筈はないのでありますし、體も出來るならば、達者で暮したい、財産も出來るものならば、成だけ澤山こしらへたい、職業も出來るだけ繁昌をして、一家一族が安樂に平和な生活を送りたいと云ふことは人間として何人も有つて居る當然の慾望であります、そこで無事泰平の時は別にそれ程のことも考へないのでありますが何か家内に病人でもあるとか、或は又引續いて何か不幸でもあるとか云ふ場合に　第三者の誰か物好きな人から『どうも、あなたの家は家相でも惡いのではないか、一遍觀て貰つたら、どうです』と勸められると　今までは別にさう云ふことをば信じて居つたのではないが、ツイ勸められる儘に家相屋さんの所へ行つて、間取か何かを觀て貰ふと、矢張り『あなたの家は家相が惡い、どうも物置きの位置が宜しくない、便所の方角がどうであるとか、入口は此方に向けなければならぬとか、庭にどう云ふものがあつて、どうであるとか』兎に角家相が惡いと云ふことを聽かされると、家相と云ふことに餘り重きを置かない方でも、何だか知らないが、昨日までは愉快に出入りの出來た家も、それからはどうも一種の不安を感ずる、さう云ふやうな心持になるものらしいのであります其は單なるお話でなく、そんな方に度々私共はお會ひをし、又御相談を受けたことも從來一再ならずあるのであります、或は又一軒の家をば借りるとか買ふとか云ふ場合に致しましても、どうもあの家は家相の善くない家である、何時も病人が絶えない、あの家へ入つた人は屹度變な斯樣なことを聽かされますと、誰しも進んで其家をば借りて見やうと云ふやうな氣持にはなりをくいものであります、殊に――多少御婦人もお見えになつて居るやうでありますが、御婦人などがさう云ふことをお聽きになると、非常に氣にされるのでありま

す、人間と云ふものは矢張り理性ばかりではいかない、どうも『センス』に憑へて、物事を判斷したがるものでありまして、さう云ふ理窟はないと思ふて居りましても、何かさう云ふことを聽かされると、どうも心持が悪くなる、御婦人に於て殊にさう云ふことが多いのであります、『自分は餘り家相のことを考へないが、どうも家内がやかましく言ふから、兎に角家相の善いやうにして置いて呉れ』と云ふことを度々聽くのでありますが、御婦人の方にさう云つたやうな場合が餘程多いやうに私は感ずるのであります。

凡そ易者とか家相家と云ふ人々は唯今申上げるやうな人間共通の弱點を捉へまして、其弱點に乘じて——と言ふと、少し語弊があるかも知れませぬが、色々悪いことをば列べられると、ツイ聽くが儘に迷はざるを得ないことになるのであります人間の事と云ふものは、假に十の事があれば、七つまでは悪いことであります、それは私が甚だ不遇であつて、私自身の經驗だけがさう云ふことであるのかも知れませぬが、恐らくは是だけお集りになつて居る方々も靜にお考へになれば、さうであらうと思ひます、親がどうしたとか、兄弟が患つたとか、夕べ斯う云ふことがあつたとか、今日途中でどう云ふことをしたとか、日々のことを考へて見ましても、十の事實があれば、七つまでは悪いことがあつて、善いと云ふことは二つあるか三つあるかでせう、兎に角人の事は悪いと云ふことを言つて居れば、大抵中るものであります、中れば、人間は迷ふものであります、或は易者や家相家が悪い家だと云ふ家に入つて、悪いことがあるかも知れませぬ、併しそれは家相が悪いから、悪いことがあるのでなく、人間の生活がどつちかと云ふと、悪い場合の方が多いのであります、殊に病氣の如きは誰しも病氣に罹からない人はないのでありまして、主人が患ふとか、息子さんが病氣になるとか、奥さんがわるいとか云ふことは家相の如何を論ぜず、是は有り勝のことでありまして、病難があるのは家相が悪いからだと云ふ如き速斷の出來ぬことは明な事實であります、無論易者や家相家と申しましても澤山な人があります、

私は一々さう云ふ方に會つて、其御意見を聽いた譯ではありませぬから、能く知りませぬが、兎に角易者とか家相家とか云ふものは色々の職業の人色々な社會的地位の人、色々な氣質の人に接しまして、其事業上の事や、其運勢であるとか、一家の内情と云ふやうなことに付て多くの人の身の上に相談を受けて居る所から、其多年の經驗に依て一寸人を見れば、此人は斯う云ふ種類の人である此人は斯う云ふ癖があつて、斯う云ふ缺點があるとか云ふことを觀破する一種の見識があつて、隨分爲になるやうな話が出來るかも知れませぬけれども、併ながらそれは餘程達人のことであつて、そこからの大道易者にさう云ふ見識があらうとは信じられないのであります、家相の如きも同じことでありまして、世の中には所謂家相設計と云ふことを標榜して、家の間取や何かをあゝせよ、斯うせよと、色々相談を受けてやつて居るものもありますが、それも殆ど住宅に限つて居るのでありますから、長い間何時もこんなことばかりして居る結果、自然と住宅に關する一個の見識を有つて私共の考へ及ばぬ立派な說も出て來るかも知れませぬから、私はさう云ふ人の言ふことを以て必ずしも總てが俗說であるとか、取るに足らぬと申すのではありませぬが、併ながら左樣な人は家相家と云つても餘り澤山はない、殆ど無いと言つて可からうと思ひます。

又家相に關する書物も昔から隨分澤山出來て居ります、それ等は可なり世間に流布されて居りまして、今でも天保何年とか、弘化何年とか云ふ版の本がさう云ふものを買つて居る本屋の何處かの隅にありまして、矢張りチラホラ賣れて行くさうでありますが、私も詰らない家相に關する本を書いて居りますが、澤山も賣れませぬけれども、矢張りボツ〳〵賣れて行くさうであります、さう云ふ點から考へますと、さう云ふものをお讀みになつたり、又お調べになる人も世の中には可なり多いやうでありますが、さう云ふものゝ冒頭に書いてあることを見ますと、必ずしも不合理なことではない、至極尤もなことを書いて居る、一二の例を申しますと『居は氣を移す』是は孟子か誰かの言葉

でありますが、何時も家相の本にはそれを其枕に書いて居ります、或は『奢らんよりは寧ろ儉せよ』幾ら金があつても奢るのはいけない、萬事儉約な家が可い、或は又土地も家も兩方とも非常に善いとしても、人間が善くなければ、其効が無い、どうも家相が善いかと云つて、泥棒や詐僞漢が居つて、其家は決して發展する譯はないのでありまして先づ其人が正しいと云ふことが根本問題である或は又人をして安に居らしむと云ふのが即ち家相の極意であるとか、或は家相は陰陽に基いて自から足るを知るの道であるとか、さう云ふことは澤山ありますが、兎に角通俗の家相書の首めには大抵斯う云ふことを書いて居ります、是等が誰が見ましても、亦今日私共が見まして洵に尤もなことで、斯う云ふ趣意で家相を說くと云ふことは決して悪いことでなからもと思ふ、併ながら更に一枚二枚と繰つて、其細論に入ると、甚だ悲觀せざるを得ないのでありまして、所謂俗說で、取るに足らぬやうなことが多數であります、根本論其ものに付ては必ずしも大きな間違ひはないのでありますが、其細說に至つては到底今日の我々が取つて以て住宅建築の定規とするに足るやうな種類のものではないと云ふことは明であります。

一體物があれば、必ずそれの相（カッチ）があり、相（ソウナ）があれば、其處に吉凶、可否、善悪の問題が起つて來るのは當然であります、住宅に付きましても、千軒の家があれば、千樣の波瀾があり、萬軒の家があれば、萬樣の波瀾があり、各々善い點と悪い點とを持て來ることは當然でありまして、私は之を種々相と申して居りますが、其處に非常に面白い所があるのであります、甲の家に善いと云つてもそれは必ずしも乙の家に當嵌らない、又乙の家に善いと云つても、それは必ずしも丙丁の家に當嵌らない、例へて申しますれば、能く家相屋さんのお說を聽きますと、乾食と申して、食は乾に限ると云ふことが總ての家相の本に書いてあります、併ながら食は乾に置くのが吉相であると申しても地形の如何に依て必ずしもさうはいかぬ、田舍なら兎も角、都會では何時もさうすると云ふことは出來ませぬ、矢張り其地形々々に應じて適當な位

地に土藏を造くと云ふことは止むを得ない必要であります、其止むを得ない必要を裏切つて、態々西北の所に藏を持つて行く必要が何處にありますか或は門を東に向けるのが一番可いと云ふことが書いてありますが、成程東向に門があると、朝日を受けて出入りの心持も大變好いのでありますが、併ながら道路が東側にある場合こそ、東の門が後に立つのでありますが、假に道路が西とか西南にあると云ふ場合には、其處に何の必要も私共は見出されないのであります、斯う云ふやうな工合で、家其ものには決して一定の定規のやうなものがあつて、必ず斯の如くしなければならぬと云ふ筈のものでなくして、斯の如くありたいと云ふ實際の要求を基礎に造ることが、卽ち家相の極意でなければならぬと私共は考へて居るのであります。

由來人間は常に環境の支配を受けて居ると云ふことは爭はれない事實であります　斯う云ふ（公會堂）廣間に這入りまして、此壇上に立つた私の心持は矢張り聽衆諸君の心持に支配される、それが此處を出て道路を歩けば、又道路に出たやうな心持になる、從て住宅の如きも、快い家に住めば心持が好いが、薄暗い陰氣な家に居れば、矢張り陰鬱な氣分になるのであります、是は爭へない事實であります、子供を育てるにも甚ださう云ふ影響が深いのでありまして、明い部屋で心持好く育つた子供は快活でありませうが、どうも薄暗い穴のやうな家では快活な子供は出來ないと思ひます併しながら茲に考ふべきことは人は其環境に支配される力も非常に強いけれども、亦同時に人間と云ふものは其環境を支配して行くことも出來るのであります、此公會堂を造つたのも人でありまして、環境を支配し造つて行く所に人間の強い所があるのであります、舊來の家相說は總て人が環境に支配される力を非常に大きく見まして、人間が環境を支配して行く力の強いことを少しも見て居らぬのであります、卽ち舊來の家相說は其說の可否如何は論ぜず、其點に付て何等注意して居らぬと云ふことが其根本に於ける非常な間違ひであらうと思ふのであります。

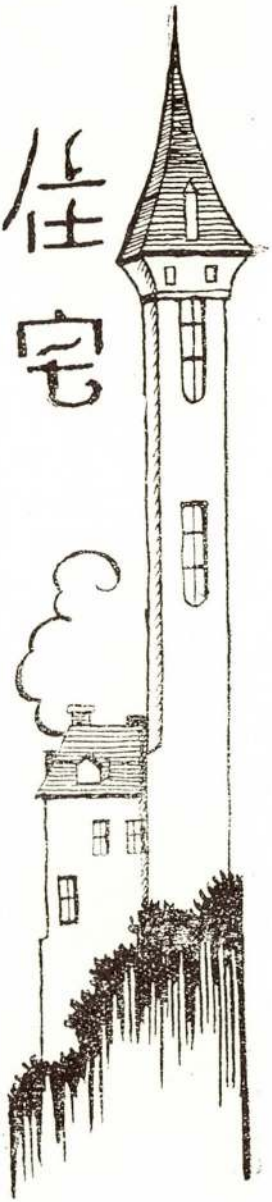
こゝで少しく家相の由來——從來日本の家相說

がどんな風に傳つて來て居るかと云ふことを簡單に申述べたいと思ふのであります、凡そ物の吉凶を占ひ、豫言すると云ふやうなことは餘程古くからあることであります、我國に於ても神代の昔からそんなことがあつたさうであります、又相互に一種本能的にさう云ふ性質がありまして、俗に簡單な數で占つて見たり、何か色々な占ひ方があつて、待人の來否を占ふとか、失せ物を搜すとか何とか云ふことは殆ど遊戲的になつて居りますが人間はさう云ふことを非常に好むものであります是は洋の東西を問はず、古今を論せず、殆ど人類共通の一つの性質と思ふのであります、併しながら此占ひとか今日謂ふ家相のやうなものが我國に傳へられましたのは無論ズッと後のことでありまして、歷史に依りますと、繼體天皇の七年に易が傳つたと云ふのでありますから、丁度今から千四百年前であります、併しながら當時易が傳つたからと云つて、直に今日の如く筮木を列べて占つたのではありませぬ、筮木を以て人間の運勢を占ふやうになつたのはそれよりズッと後のやうであります、弘法大師が始めたと云ふことを聞きますが物識りの話を聽きますと、それは信ずるに足らぬ說であるさうであります、兎に角確な所は矢張り大寶令の出た時に政府に陰陽寮の云ふ役所が出來陰陽博士と云ふやうな稱號も出來て、朝廷其他日本の上流階級が陰陽道を非常に信仰した、或は宿曜師と云ふやうなものがありまして、天體の運行を觀て、色々人間の運勢を豫言し、又相地と云ふやうなことが一種專門的に宿曜師とか陰陽師に依て取扱はれたらしいのであります、今日の家相方位と云ふやうなものゝ起源は大體其時（今より約八百年前）を出發點とする、斯う見て可いかと考へるのであります、併しながら是とても唯今申上げるやうに初は貴族なり一部上流階級に行はれたに止つて居りまして、今日のやうに一般民間にさう云ふ考が流布して居つた譯ではないのであります、然らば今日のやうに家相や地相が殆ど總ての人の耳に入り、考に及ぶまでになつたのは何時頃からかと申しますと、是は更に後でありまして、私は德川時代、殊に其中頃以後のことであらうと

考へるのであります、御承知の通り日本の文化は平安朝以來戰國時代に入つて非常に混亂して、唯今申上げました陰陽道の如きも戰亂時代に及んで殆ど影も形も無くなつてしまつたやうになつたらしいのでありますが、德川氏が天下を統一して、漸く世の中が落付くやうになつて、儒學が興り、同時に易も研究されるやうになり、從て賣卜者、今日謂ふ八卦見と云ふものも出來て來た譯でありますから、此易者に次いで、所謂陰陽師、家相や方位の先生達も生れて來たものであらうと思ふのであります、それが德川時代が段々爛熟するに從て、殊に其末期に及んで益々盛になり、今日世の中に行はれて居る家相や方位の書物も殆ど其當時の出版で、今から七八十年前、古くも八十年前後のものが最も多いのであります。

兎に角今申上げたやうに家相說と云ふものは日本に於きましてもそんなに古いものでなくて、德川氏の中頃、約り德川氏の極端なる消極的政策が日本の民心をして萎靡頽廢せしめ、何等活氣なく人間は自からどうすることも出來ない、唯運命の指す儘に動かなければならないと云ふやうな思想が一世を風靡した時代に考へたものが今日の所謂家相方位の說であります。此一事を以て見ても、千九百二十三年の大正の今日斯う云ふものを振廻はして、自分の住宅の根本問題を決定しやうと云ふことの如何に間違つて居つて、如何に時代後れであるかと云ふことは賢明なる諸君が直ちに御了解になることゝ信ずるのであります、今日はもつと立派な根據のある建築學者の議論があり、家相說の善惡は論せず、さう云ふ古い時代のものに依らなくても、其說に聽いて、立派に家は出來上のであります、此一事を申上げたならば、外に何等申上げることはないと信ずるのであります。

夜振火や
河上の瀨
に目澄めり



住宅

電化された嵯峨野の新邸

郊邨

今より二百二十年前に物された俳人服部嵐雪の『裝遊稿』てふ紀行文を讀むでみると、洛西嵯峨野の情景を詠むで、

嵯峨中の淋しさくゞる薄かな

と云つて居る、奈何にも嵯峨野である。最も近い處で、明治大正の短歌壇に時めいた某氏の歌にも

風ふけば嵯峨野の芒光りつゝ
うなじにさやる道行く人ら

と詠むでゐる。

その『淋しさくゞる薄』の原も、『光りつゝうなじにさやる』芒の郷も、今は『文化』の賑かさを響かせて嵯峨野の閑寂は、赤瓦綠壁の「屹亭立（バンガロー）」や「晩霞樓（コッテージ）」などで大分明るさを增して來た。西洋流「阿妻屋」とでもいふような歷史に富み、情趣に饒ふ嵯峨野こそ、近代郊外住宅地として好箇な環境たるべきである。

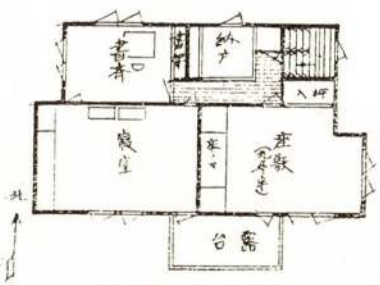
そのかみ、太平記の背景と成り、世捨て人の遁晦地であつた嵯峨野に、記者は今、最も近代式な鮮し味と活々しき氣分に充てる電化の家を看出したことに、恰當、寢ばなを覺まされたようなアノ

淡い驚異さの氣分を懷いてゐる。それは、京都市立第一商業學校長竹谷辰郎氏新營の邸宅である。邸宅そのものに出來得る限り最少の工費を以て、凡ゆる文化的施設を取り容れた事は、近來各所に試みられてゐる處の、所謂文化的住宅若くは洋風建築と左して異らないのであるが、熱と光と力とを要する處に、悉く電氣を用ひて、所謂電化されたる處が、近來の最も強い一傾向たる住宅の文化に先鞭を附けたる誇りを容さねばなるまい。是れと同時に、讀者はその Planning を一瞥したならば、奈何にも、簡潔に要約されて、各室の配置位地とその聯絡とに快さを看出すであらう。聞けば我建築學界の一重鎭たる某博士の手に成つたのを、竹谷氏が間接に獲られたのだとの事である。先づ此處にその Plan を掲ぐることゝしよう。

此處に挿入の Plan は別段蛇足を加ふるの要はないが、客間兼用の居間を思ひ切り弘く取つてそれを中心に、生活條件を充たす最要限度に二三の室を簡潔に配置した事は、最も斯のプランの焦點であらう。而して二階約十帖を純然たる日本座

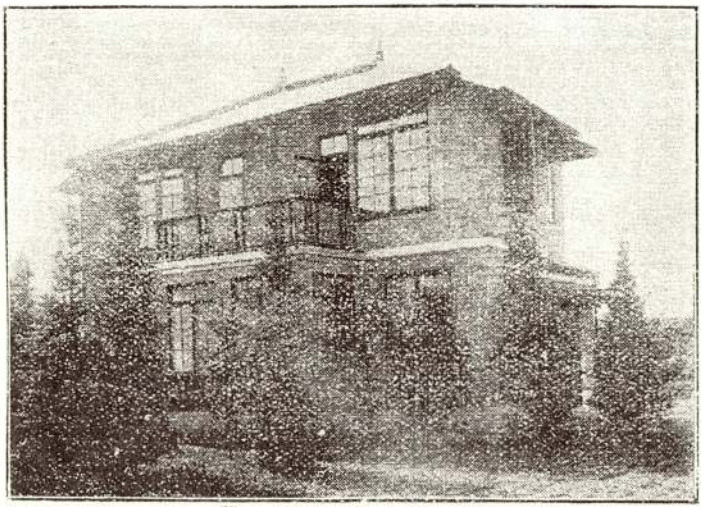


階下平面圖



階上平面圖

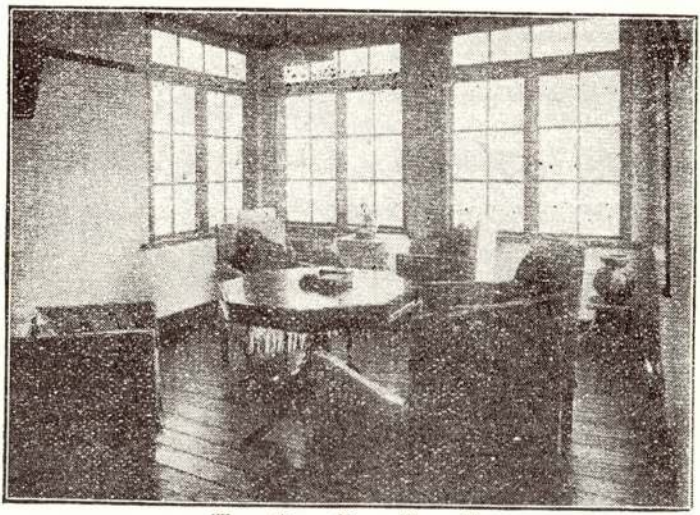
敷と成したのは、所謂二重生活の嫌ひあつて折角思ひ切つた新生面の生活様式を拓いた斯の家としては、百尺竿頭一歩を缺ぐの感はあるけれども、洋式と日本式の兩生活と片足づゝ踏んばつてゐる現代としては、蓋し餘儀ない事であらう。主として米松を用つた木造建築の總建坪四十六坪七五に約そ壹萬圓を要したとの事であるから、ざつと二百圓坪であるがその工費の割りに纏つた而も相當の美觀を有つてゐるは施工と材料の上に餘程苦心の程が窺はれる。部屋の一つ々々に就いて、例へば、玄關の土間に外套や帽子を掛け得るよう設備したるが如き、箪笥代りに造り附けの曳出棚と成したるが如き、或は書架を押入代りの造り附けと成し、乃至は、危險率を少からしむる具風よりして二階に通ずる階段を三箇所に踊場を設けて、三つに屈折したるが如き、細かい處を紹介すれば、隨分と創意的なものが少くない。けれども、記者は、斯の邸宅の電化を紹介するの前途を控へてゐるから、升麼事は端折つて、直ちに電化の記事に進むことにしよう。



竹谷氏新邸

先づ、臺所に取り附けてある開閉器（スイッチ）を一捻りすれば、例の唸りを立てつ四分の一馬力のモーターが回轉して、井水をタンクに、走り元の水栓の一つを捻れば、タンクに滿へたる清水は混々として迸り、若しそれ冬季に暖水を得むとすれば、今一つの水栓を一轉せむか、モーターの回轉と共に、井水は直接にそ

の水管より奔瀉する。炊事には、スキツチ一つにて忽ち足り子供の指頭一觸にて、在來の炊餐事を遣つて除けるのだから、寧ろ簡捷過ぎてあつけなさを感ずる位である。それに就いて、竹谷氏は夫人と共に語るよう、曰く『電化してからの私共の生活はまツたく餘り簡便さに物足りない位に思はれます。考へても御覽なさい、私共日本人の慣習は、少くとも朝毎夕毎にアノ煩雜な順序を經ねば容易に食卓に向はれない、女中を使ふ理由の大部分は斯の仕事に在るのです、然るに、電熱を使ふ樣になつてからは、例へば朝餐の用意にした處で、前晩多少の準備さへ爲て置かば、子供が用達しの通りすがら、ちよツとスキツチを捻つてさへ置かば、そののち幾十分間に出來上るといふメンードに出來てゐるから世話は御座んせん』と。斯うした簡便な設備は、臺所の電熱許りでなく、件の洋式な『居間兼客間』の煖房裝置から二階の日本座敷用の火鉢に、炬燵に、風呂場から『アイロン』の末に到るまで用ひられてゐる。そうして、それ等の經濟的關係を訊いてみたが、電燈室內十三燈に、門燈一つ、四分の一馬力モーターを動かす電力と、炊事と風呂用にストーヴ、火鉢と炬燵にアイロン之等の電熱を合せて、一箇月最高二十二圓許から最低率四五圓の範圍に過ぎない、就中、燈光と動力用に大概五六圓を費すとのことであるから、電熱としては、相當な家族を有つてゐる中產者生活

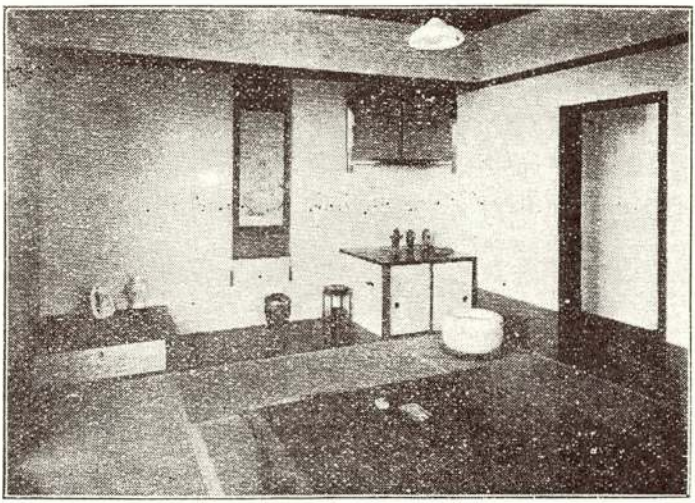


居間兼客間

の要する木炭費と餘り大差はない、簡便と、それから影響する生活の整理とは、蓋し斯る設備の儲けものである。

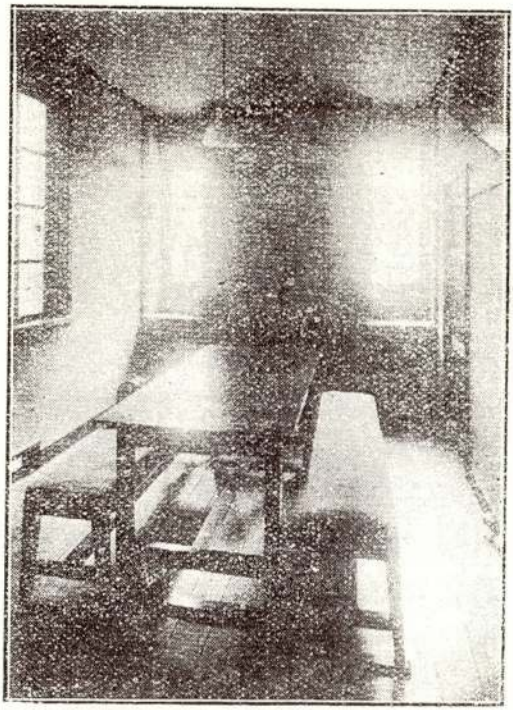
同氏が斯うした生活に轉回したに就いて、そこには餘程な體驗から出たものらしい。それには先づ以下同氏の話しッ振りに聽いてみるがよい。

曰く『わたしは、十六年許前アノ雪の北海道に住むでゐたのですが、動作や防寒などの必要上、既にそのときから、日本流の生活の樣式を改善したいものだと考へて居りました。仍で、在住中先づ二つの事を斷行致しました。それは、私の一家族が和服を廢して洋服に爲たのと、しつぽく臺式の食事から、椅子テーフルに變つた事でムいます。それ以來、私共の仕事と子供等の慣習に大層好い變化を受けました事は、子供等の動作が規律的に成り、私達の仕事が簡捷になつたのがその著しいもの丶一例でムいます。斯うした體驗による當然な歸趨は、次いで住宅そのものに、少くとも洋式味を多分に取り入れたものに改造する事でムいますが、是れは財力との關係上相當に容易い問題ではムいません。けれども、幸に時機が熟しまして、今回思ひ切つて彼樣なものを建てました。少々手前味噌の嫌ひありますが、是れでも、我々俸給生活者の新住宅として多少標準と成る樣に拵へた積りでムいます。勿論完全とは行きませんが、是れで一先づ私共の生活樣式の荒ましな處を改善した事になります。そして、

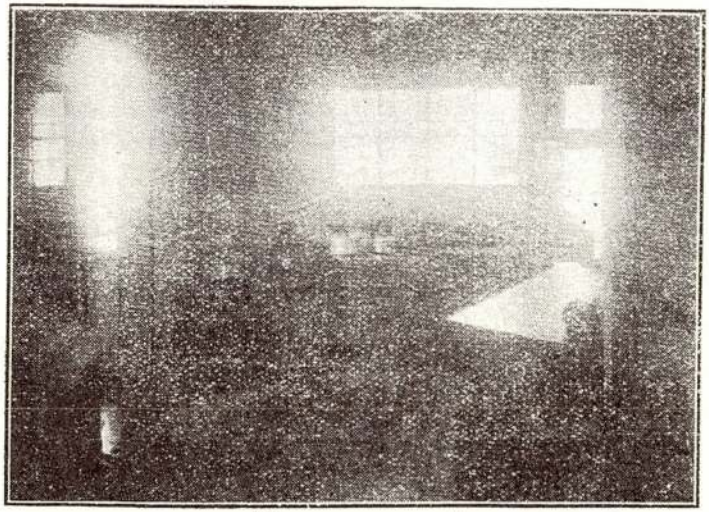


二階の日本間

衣食の改善味は先き程お話し致した通りで、住の改善味は種々と良い効果を與へられて居ります。その一々を申上げられませんが、先づ目ぼしい處で、私共が外から歸つて來てもその儘椅子にて安息が出來、日本流の更衣の面倒抔はありません。その他物の取り扱ひでもそれ〴〵一段と規律が整



食堂



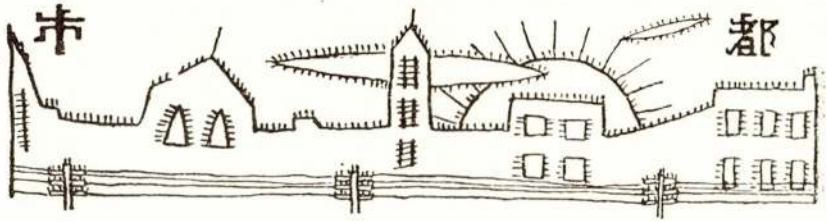
臺所

ふて、子供抔の慣習にも良い影響を與へて居ります。殊に、日本流のアノ煩はしい面も非衛生的な掃除手間が省けるだけでも大した儲けものです。先刻お話した炊事の簡便になつた事と併せて、七人の家族である私方は女中を廢して尙ほ且つ主婦に充分時間の餘裕が出來ました。それだけ子供の敎養にも、團欒の歡樂にも、自己の修養にも、一段と途が開けた譯で、是れだけでも大した効果です。事の序ですが、日本の洋風住宅の謳歌者でも牢固として拔け難い日本人の慣習上、椅子式生活では充分に身體の安息を得られない、と申す人がありますが、私の經驗として、その原因は椅子の寸法に在る事と思ひます。家庭を事務所と取違へた椅子では、安息の得られないことは當然です。日本人の體驅に適當するように成るべく低い椅子にすれば升歷事はないと思ひます。私は毎日嵐山電車で往復して居りますが、短時間だのにアノ電車では非常に疲勞を覺へるので段々詮索してみました處、その原因はシートの高い事、大概の人は皆な足を浮かしてゐる事に在るのを發見しましたが、椅子生活も同樣に考へられます』

話はそれからそれへと、體驗から割出した洋式生活に電化の謳歌振りに花が咲いて、記者も大層有益に快く時を過した。まだ書き度いことの多くを有つて居る、紹介したい事の少からぬものがまだ遺つてゐる。けれども、その反比例に紙幅は最早遺つてゐない、總に輪廓を叙したに過ぎないが、斯うした先輩者のある事を讀者に告ぐるに止めて措く。

話は興盡きざるも、時は竭きむとしてゐる。嵯峨野の空を搖がす梵鐘の響きは、矢張り昔ながらの音をもつてゐる。綠亞赤瓦の洋館が竝へても環境は依然たる物語集の背景である、けれども時代の進化は此處にも姙まれてゐる。社會學者マッギヴァは甘い事を云つた、曰く、『進化は內的過程に依る性質の實現を意味する』と、嵯峨野も巖谷は亞米利加邊りの郊外となるであらう。

× × × ×



初めて見た倫敦（下）

法學士　小川市太郎

倫敦の汽車と停車場

獨り私ばかりではありません。倫敦に來て先づ何人も驚きますのは、交通機關の非常によく發達して居ることであります。第一鐵道で見ましても、それが實に四通八達で、倫敦の内外は無數の鐵道網で掩はれ、鐵道の終端驛だけでも、市内に十七箇處からある上に、大倫敦内の停車場全部を合せると、その數が六百に達すると云ふから、この一事だけでも、流石は鐵道國の首都だと肯かれる。

英國の鐵道は凡て私設會社の經營になつて居りますが、會社によつて汽車の設備に非常な優劣があります。私は初めて『サウザンプトン』に上陸して、其處から汽車で倫敦の『ウォータールー』停車場に着きましたが、その汽車などは、日本でズッと以前に用ゐたやうな、列車の間の通抜の出來ない、極めて舊式なのでありますし上に便所も洗面所も附いて居りません。如何に保守主義の國とは云ひながら、鐵道の元祖とも云はるゝ英國が、今時こんなボロ汽車を運轉して居るのは、ドウした事かと實は意外で堪らなかつたのです。然るにその後『ユーストン』の停車場から『マンチエスター』行の汽車に乘りました所が、之れは又實によく出來て居りまして『コムパートメント』などの氣持の好いことは、とても米國あたりの汽車の比でありません。私の乘つた汽車は朝六時頃に『マンチエスター』に着く豫定になつて居りました

が、その前汽車のボーイが私の處にやつて參りまして、この汽車が『マンチエスター』に着いても、ホテルに行くには未だ時間が早いから、急く用がなければ、私がお茶を持つて來て、お前を起すまで寢て居れと申すのです。固より望む所ですから云ふ儘に寢て居りましたら、九時頃にお茶を持つて來て起して呉れました。朝寢坊の私には、之れが何より嬉しかつたのです。

英國の汽車には一等と三等があるのみで、二等はありません。以前はあつたそうですが、何時の間にか廢せられて了つたそうです。之れは佛蘭西の汽車に一等二等があつて三等がなく、獨逸の汽車に一等から四等まであるのを比較して、鳥渡面白い現象です。

倫敦の停車場も廣くて相應に立派です。(無論紐育の『グランド、セントラル』等の規模の宏大なのには遠く及びませんが)而して倫敦の停車場で初めて行つたものゝ目に着きますのは『プラットホーム』の多いことです。日本では東京ステーションなどでも『プラットホーム』は四つか五つしかありません。然るにそれが倫敦の大きな停車場になりますと『プラットホーム』は十も廿もありまして、改札口の處に一々それに番號が附いて居ります。而して『サウザンプトン』行は何號の『プラットホーム』『リッチモンド』行は何號の『プラットホーム』とチヤント極つて居りますから、初の中はマゴつきますけれども、少し馴れて參りますと、直ぐ判つて非常に便利です。

倫敦の電車と乘合自動車

倫敦は郊外鐵道の外に、高速度電車が、又實によく發達して居ります。倫敦の高速度電車は紐育のやうに『サブウエー』でなく、大部分は『チユーブ』でありまして、地の底に直徑四間もある鐵管を埋めて、その中に複線の軌道を通じ、その上を電車が走るやうになつて居ります。停留場で切符を買つて廊下を傳つて行きますと、其處には三十人ぐらい乘れる大きな昇降機がありまして、それに乘つて降りて行くと、電車の乘場に出ます、チユーヴの深さは地下三十呎ぐらいの處もあれば、

百呎以上の處もあつて一定しませんが、六七十呎が普通であります。電車に乘らふとして、初めて穴倉に入つて行く時の氣持は、餘り好いものではありませんが、馴れて了へば何でもありません。それに『チューブ』の中には非常に明るい電燈が點つて居りますから、之れは地下六十七呎の穴倉などゝは思はれません。倫敦の地下鐵道は、五つの會社が別々に經營して居りますが、共通の乘替切符を發行して居りますから、別段不便を感ずるやうなことはありません。而して『チューブ』の中には、大きな札に行先と乘替場所を詳しく記して居りますから、甚だ判りいゝのです。倫敦の地下鐵道は道路哩にして百三十哩もあり、一日の乘客三百萬人を算すると云いますから、紐育の高速度電車を除いては、輸送力の大なる點に於て世界中他に及ぶものはありません。

それから倫敦に於て、鐵道と地下鐵道とを除いて、普通最も多く利用せらるゝ交通機關は、乘合自動車と路面電車でありますが、倫敦の路面電車は、郊外と交通の餘り頻繁でない場所にのみ限られて居りますから、市内の交通機關として、最も重要の任務を爲すものは、乘合自動車です。倫敦の乘合自動車は二階付で、上の方を top と云ひ、下を inside と云つております。而して下は日本の電車のやうに硝子窓になつて居りますが、上の方は開け放で屋根も窓もありません。而してこの乘合自動車は之に一杯詰れば五十人ぐらい乘れます。併し馴れないうちは、餘り乘心地の好いものでありません。而して倫敦の市中から、乘合自動車の遠く郊外に延びて居るのは、實に驚くべきものでありまして『アクトン』から『バーキング』に行くのなどは、その里程が十七哩もあります。何でも倫敦の人は『イエリング、クロッス』から三十哩の間は、何處でも到る處乘合自動車で見物の出來る日は、決して遠くないと云つて居ります。今日でも乘合自動車の乘客は一日二百五十萬と云ひますから、實に旺なものです。

倫敦の公園

倫敦には到る處大きな公園があります。先づ第

一皇室の管理に係る「ハイド、パーク』『ケンジントン、ガーデン』『セントゼームス、パーク』『リーゼント、パーク』『グリンニッチ、パーク』だけでも、その面積は二百四十萬坪に上ります上に、倫敦府の管理の下にある公園は約六百萬坪、更に各區會の管理に屬するものが、三十七萬八千坪、而してその他にも府内の廣辻や遊戲場を合せると之亦百三十二　坪に達すると云いますから驚きます。而してこの外にも倫敦の近郊には、或は『リッチモンド、パーク』（百廿萬坪）であるとか、或は『ウヰンブレドン、コムモン』（百廿萬坪）であるとか、その他『エッピング、フオレスト』（六百七十二萬坪）であるとか、到る處非常に大きな公園や森林がありますから、倫敦に居りますと何處へ行つても遊覽の場所に事を缺きません。之れが吾々が日本大都市に居つて、鳥渡都會の塵を避けて頭腦を休めやうと思つても、手近の何處にも安息慰安の場所を見出すことの出來ないとは、大變な相違です。

『ハイド、パーク』

倫敦市内にある公園の中で、最も大きくて且つ最も有名なのは『ハイドパーク』でありまして、その面積は四十三萬五千坪ほどありますが、それは直ぐ隣の『ケンジントン、ガーデン』に續いて居りますから、この二つのものを合せると七十二萬坪からになります。而して之れは獨り『ハイド、パーク』に限つたことではありませんが、凡て倫敦の公園は大きな自然の野でありまして、廣漠たる芝生の平地の處々には、コンモリした老樹の森が茂り、その間を乘馬道や車道が通ふて居りますので紐育の『セントラル、パーク』のやうに新しく綺麗ではありませんけれども、その代り古色と野趣の大に掬すべきものがあり、光と艶はないが、非常に滋味に富むで居ります。『ハイド、パーク』の中で、一番景色の佳いと云はるゝ『サーペンタイン』などにしましても、紐育の公園のやうに、岩も谿もあるのではなく、廣い長い池が美しい紺碧の水を湛えて、それに鬱蒼たる樹木が、影を涵して居るばかりです。併しその柔かな温しい景色の中には、何とも言ひ知れぬ無限の情趣のあるのは、倫

敦の公園の特徴です。紐育の公園に行きますと、何處までも公園らしい感がしますが、倫敦の公園は、何處でも自然の森と野でありまして、之れが人の造つたものとは思はれません。

『テームス』河

それから倫敦で私の長く忘れることの出來ないのは『テームス』河です。『テームス』河は水源地から河口まで二百廿八哩、その灌漑區域は六千百哩に達すると云いますから、島國の河としては、隨分大きな方です。『テームス』河の流量は淀川などに比して寧ろ少ないのですが、それでも此河の下流の利用の極めて大なることゝ、上流の風光の如何にも絶佳なることは、日本の河などの比でありません。

日本では淀川のやうな流量の多い河でも、毛馬の閘門以上は、殆んど客船の便がないと申しても可いほどです。然るに『テームス』河では、小蒸汽は隨分上流の『オックスフォルド』邊まで毎日往復して居ますのみならず、塔橋の直き下の處までは

ドンな大きな海洋船でも自由に上つて來てそれが船渠に横着になりますから大したものです。この前大阪商船會社で、別府通ひの紅丸を端建藏橋の下まで溯航せしめたことがありますが、その時に之を廻はすのに、非常に難義したと云ふことを聞いて居ります。日本の河は如何に大きいと云つても、僅か二千噸ばかりの船の始末に困るのですから、『テームス』などに較べると情なくなります。無論『テームス』とても下流はモトこんなに廣い深いものでなかつたのですが、船の型が大きくなるにつれて、絶へず非常な金を投じて、之を浚渫擴張した結果、コウなつたのであります。

『テームス』の下流、塔橋から下は、大阪で云ひますと、富島から築港邊に當るのでありますが、其處に行きますと、河の北岸には『セント、カザリン』『ロンドン』等の船渠を初め、大きな船渠が齒の缺けた櫛のやうにヅラリと駢んで、それに世界の大艦巨船が、山の如く林の如く碇泊して居りまするし、此等の船渠の後には、大きな倉庫が長い〳〵方列の陣を布いて、その間の空地には石炭

の山が屋根よりも高く積まれ居る所などは實に何とも云へぬ壯觀で、流石に倫敦の盛況が想ひ遣られます。何しろ倫敦港一年の輸出入高は、一年間に二十五億圓餘で、十分間に一隻の海洋船が入港すると云いますから驚きます。

それから『テームス』河について、モウ一ツ長く私の記臆に殘つて居るのは、この河の景色です。倫敦市中でも『ヴクトリア、エンバンクメント』や『ウエストミンスター』橋邊の、街の光景の美しく且つ嚴なことは、前に述べた通りでありますが、更にその上流の景色と來ては、ソレは全く繪であります。トテも私の拙い筆ではその萬分の一も形容することは出來ません。私は暫らく『テッデントン』と云ふ『テームス』の上流の町（倫敦の中央から汽車で約三十分）に住つて居りましたから、郊外の『テームス』とは特に親しみが深いのです。『テームス』は日本の河とは異ひまして、河原もなければ、又峭壁斷崖の奇もありません。唯碧い深い而して美しい水が、溶々として湛へ、緩々として平蕪の間を流れて居るばかりです。併し『テームス』には、日本の河などに見ることの出來ない無限の趣と情があります。

ソレは先づ河の姿です。ウヰンゾル宮殿の邊から倫敦の入口の『バッタセー』の公園の邊まで、里數にしては幾許もありませんが、その間を或は廣く或は狹く、鈎の如く環の如く迂餘索廻の有りたけを盡して、波も立てず靜に眠つたやうに流れて行く、この河の姿の美しさは、實に何とも譬へやうがありません。而して河の中の小さな嶼の青葉の茂みから『ボート、ハウス』や『テント』のチラホラ見ゆるのも何となく興がある上に、河の兩岸には天を蔽ふ老樹が鬱蒼と蔭を交へて、美しい藍のやうな水に涵り、森と、牧場と、公園と草原とゆかり有る古城とが、其間に點綴交錯して眼前に展開するなど、宛るでパノラマその儘でありますが、更に老樹小阜の間から洒灑な赭煉瓦の別莊が隱見して、波を碎く短艇のオールがピカリ〳〵夕陽に閃めくなど、まことに繪も及ばぬ長閑な美しい景色で之を何と形容して可いか私には判りません。

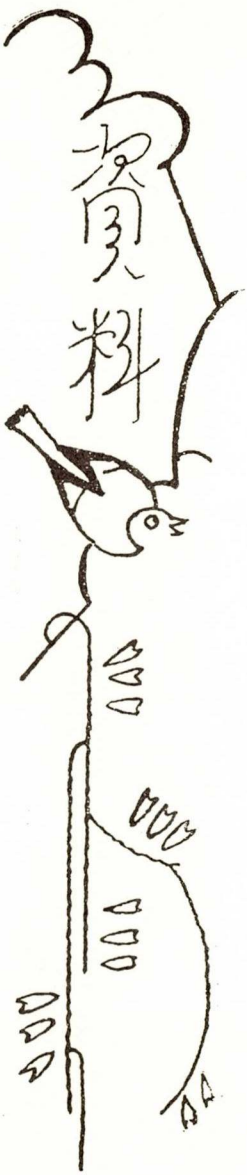
然るに之に對して我國はドウかと申しますと、

大阪の淀川の如きは、水運の點に於ては我國有數の河でありまして、河口だけは兎に角帆檣林立の盛況を見せて居りますが、上流に參りますと、市内は無論のこと、郊外の殺風景は非常なものでありまして、其處には公園は勿論、樹木も森も何もありません。而して河の兩岸にはボロ工場が點在して盛に煤煙の雨を降らし、汚ない土手の上にはブカ〳〵の田舍道が迷走して居るばかりです。東京の向島なども私共の學校に通つて居つた頃までは、小さいながらも水光と樹影と相映じて相應に風致に富み、都門の塵を避けて半日の清遊を試みるには好適の地でありました。然るにこの頃の向島と來ては、河の水がヒドク汚なくなつた上に、岸は工場に蹂躙せられて、全く見る影もなくなつて了い、ワザとコンな處には遊に行く氣にもならない。倫敦の『テームス』のことを考へて日本の大都市の河の利用と美の點が餘りに閑却せられて居ることを思ひますと、私は情なくて堪りません。

（完）

通り雨葉かげにそゝぎ朝風の

さやぎもつるゝ窓邊より見ゆ



土地價と建築費より觀たる家賃

一記者

家賃を決定する條件の、主に地價若くは地代と建築費にあることは、今更めて申すまでもない事である。就中、建築費は、勿論材料の價格と勞賃の二つによつてその内容を成すが故に、斯の二つの變動によつて、又それを巧みに利用する事によつて、家賃額決定の一條件は有利に充たされる事も、亦新らしく申までもない。けれども、家賃額決定の今一つの條件である地價そのものに到つては、それが常に家賃額決定の上に殆むど暴君的權威を有つてゐるから、家賃額は何時も地價に支配されるのである。(地代は地價が基礎であるから是も今樣に論ぜられる)殊に、市街地價は その都邑の膨脹と共に、一種の投機的賣買の目的と成ることは、現代世界の大都市に於ける惱ましい事實である。故に地價の問題は、住宅政策上最も攻究を要すべきものである。今此處には、大阪市を中心として、その近郊を察してみることゝしよう。

無茶苦茶な値開き

最近大阪市役所の調査に成れる先づ大阪市周圍部の法定地價を觀るに基準調査坪數六千八百二十七坪餘の地

價總額は、壹萬貳千壹百圓餘にして、一坪當實に壹圓七十七錢といふ餘りに低廉さの莫迦氣た價格を示してゐる、次いで、その近郊に於ける法定地價を觀るに、等しく基準調査坪數一萬七千三百七十七坪此の地價總額二萬一千四百六十七圓餘一坪當一圓二十四錢即ち市街——都市——と坪五十錢餘の低下に過ぎない、然るに、一旦びそれ等の實際に於ける賣買價格即ち時價に眼を轉じてみると奈何にも無茶苦茶の値開きなるに聊か一驚を喫せざるを得ない。先づ市の周圍部に於て標準調査坪數六千八百二十七坪餘此の時價七萬六千五百八十三圓で、坪當平均百二十一圓となるから、之を前記法定地價平均坪當一圓七十七錢に對比すれば、約六十八倍に相當する。市の近郊に於ては標準坪數一萬七千三百七十七坪餘、此の時價總額百七十萬九千八百六十九圓にして、此の坪當九十八圓となるから、前記の周圍部法定地價に比すれば七十九倍に當る。即ち、周圍部近郊に於ける各法定地價對時價の等差は、近郊に於て實に十一倍多い是れは勿論種々の原因に因るであらうが、就中最も著しいのは無限なる膨脹力が、內より外に、即ち近郊都市の多大な將來を有つてゐると同時に、土地價の昂騰に於て周圍部の土地こそ投機的賣買の好箇な對象物たるが故であらう。更に地價の市場價と法定價の關係を一段と明瞭ならしむるため、その最高及最低價額を調べてみれば、坪當にして最高は、市周圍部法定地價五圓五十錢、時價はその約三十七倍弱に當る二百圓を呼むで居り、近郊は時價百五十圓に對し、法定地價はその約七十六分の一に當る僅に一圓九十九錢に過ぎない、若しそれ、最低價額に到つては、市周圍部の法定地價一錢といふ極めて過少なるに對して、時價はその六千倍の六十圓といふ莫迦氣た比例を示してゐる近郊の法定賃九十二錢に對して時價四十五圓、即ち、四十九倍弱はお柔しいのである、併し是れは稍々極端の比例を擧げたのであるが、場所と位置によつて、それ々特殊な比例を示してゐる、即ち三百十二倍から、百七十倍、百二十七倍、百十七倍、百倍、七十九倍、六十七倍、六十四倍、六十三倍、六十一倍といふようになつてゐるが、先づ

平均した處が、市周圍部は六十四倍、近郊は百倍といふ處である。

住宅と土地

地價が殆むど正氣沙汰でないかの如く莫迦氣切つた呼び値を唱へるのは紐育邊りにその好箇な實例が轉つてゐるのだが、前記の我宅地價の現狀を觀ても、聊か斯の嘆を發するに足りる、と思ふ。仍で、彼樣な所謂土と金との量り替へとでも謂ひたい宅地に一體どれ程な戸數があるか、云ひ換ゆれば一戸どれ程な敷地を費してゐるか、之れを調べてみるこれは、過渡期に於ける日本都市の住宅と土地との關係を考察するに於て好箇な材料であらうと想はれる。先づ例に依りて、市周圍部に於けるそれを稽へてみると、表家にして、平均平家建十坪七四、二階建十一坪三〇といふ割になつてゐる。それが裏家になると、平家建は平均一坪餘を減じて九坪五一、二階建は二坪餘を低下して八坪八六といふ割合になつてゐる。それが近郊になると、表家は、平家建に於て市周圍部と餘りの差はなく、殆むど同樣に十坪五四、二階建に到つては、表家も裏家もそれを市周圍部に比して、孰も二坪餘を增し、表家は十三坪五二、裏家は十坪五九といふようになつてゐる。併し、之を大觀したならば市周圍部に於ける住宅敷地の彼樣に比較的狹少なるは餘儀ない事としても、近郊のそれが、市周圍部と大した差のないのは、一面に於て、現在營まれてゐる處の所謂郊外住宅なるものゝ、奈何にも採算的で、田園住宅本來の目的を沒却してゐるものと謂つて可い。蓋し、二階建で多くとも十三坪を出でない敷地で何が出るものでない。それは、件の建物に對する平均敷地坪數との關係を觀れば一番早判りである。卽ち市周圍部では表家で平家建、敷地の七十七%を建坪に取り、二階建に到つては八十%を取つてゐる。近郊でも殆ど同樣な割で、表家平家建七十九%、二階建七十五を建坪に費してゐる。

建築費の概觀

家賃額決定の一條件たる宅地價と敷地の關係は以上概叙し來つた通りであるが、扨て、更らにその一條件たる建築費の奈何も見逃す譯には往かない。併し、

今此處にその巨細悉す譯には事情が容さないから市周圍部と近郊に於ける建築費を平均した坪當りを擧げて置く事に止めよう。仍で明治四十三年より大正十一年まで過去十三年間に於けるそれを觀るに、十三年前の明治四十三年に於ては、平家建三十六圓、二階建二十八圓といふ殆むど嘘のような廉價であつたが、それが十三年後の大正十一年に到つては、平家建七十九圓、二階建百四拾圓、即ち、平家に於て約二倍餘、二階建では約五倍の騰貴を示してゐる、斯の南期の中間十一年間に於ける建築費の變動は素より多趣多樣にして高低を免れないが、年と共に漸次追加し來つてゐる。今左にその一覽表を掲げて讀者の參照に供しよう。

建築費調

		一〇圓以上	三〇圓以上	五〇圓以上	七〇圓以上	九〇圓以上	一一〇圓以上	一三〇圓以上	一五〇圓以上	一七〇圓以上	二〇〇圓以上	合計	平均坪當建築費
四十三年	市周圍部（平家二階）	三	五	一								九	一六
	近郊（平家二階）		一									一	一六
	計（平家二階）	三	六	一								一〇	一六
四十四年	市周圍部（平家二階）	三	五	一								九	一六
	近郊（平家二階）	一	四	四								一三	一六
	計（平家二階）	四	九	五								二二	一六
元年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
二年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
三年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
四年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
五年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
六年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
七年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
八年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
九年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
十年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六
十一年	市周圍部（平家二階）	六	二	二	一							一一	一六
	近郊（平家二階）	一	四	一								六	一六
	計（平家二階）	七	六	三	一							一七	一六

二

年	市周二平家	近郊二平家	計二平家
	五四	三七	三二
	一五	一〇	一四
	一二	一四	一四
	一	一	一
	一	一	一
	一	一	一

年	市周部二平家二階	近郊二平家二階	計二平家二階
七年		二	二
		七	七
		九	九
		二	二
		七	七
		四六	四六
八年		一四	一四
		三五	三五
		三	三
		六	六
		六	六
		六四	六四
		一二	一二
		八五	八五
九年		一	一
		一九	一九
		八二	八二
		一九	一九
		一三	一三
		一三	一三
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
十年		三五	三五
		三三	三三
		二	二
		五	五
		三九	三九
		一八	一八
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
十一年		三	三
		七	七
		九	九
		二	二
		七	七
		四六	四六
		一四	一四
		三五	三五
		三	三
		六	六
		六	六
		六四	六四
		一二	一二
		八五	八五
		一	一
		一九	一九
		八二	八二
		一九	一九
		一三	一三
		一三	一三
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一
		一	一

以上に據つて建築費の年次高低の大様を窺ひ得るが、記者は、更らにその内容に這入つて、建築費を構成する處の主要條件、卽ち建築材料の價格と、建築勞賃の高低を調べてみよう。但、今を詳細に記述する事は紙幅の容さゞる處であるから、只その機會を示すに止めて、それ等の指數を擧ぐることにしよう。卽ち左の通りである。

年次	建築材料價格指數（一〇〇單位）	建築勞賃指數（圓單位）
四十四年	一〇五	一二〇
大正元年	一一三	一一八
二年	一〇七	一二二
三年	九一	一一九
四年	一〇五	一二七
五年	一一七	一四五
六年	一九三	一八六
七年	二四四	二二六
八年	二七七	二三〇三
九年	三〇九	三八九
十年	二四七	三九五
十一年	二四五	四二九

以上に據つてみれば、建築勞賃は殆ど例外なく年と共に昂騰して、之を四十四年卽ち斯の比較の出發終に較ぶれば、實に三倍半以上騰貴を示してゐるに反し、建築材料價格のは、大正五年より九年までの間昂騰に次ぐ昂騰を以てせるも十年十一年は約六割餘の下落を示し、之を件の出發線卽ち四十四年の指數一〇五に比すれば、約二倍餘に過ぎない。斯の事實は建築勞賃の不均衡なる關係ある事を語つてゐる。蓋し、建築家の最も考慮を要する現象である。

斯くして、記者は今愈々家賃の現狀を叙すべき場合に進むで來た。是れとても今一々詳記すること事情が容さないから現在坪當り家賃額を擧げて讀者の裁量に委する事としよう。卽ち左の通りである。

	円	
市周圍部		近郊
表家平家建	一、八三	一、八二
二階建	一、七五	一、五〇
裏家平家建	一、一九	一、五八
二階建	一、六三	一、〇七

件の如く坪當家賃額が近郊に於て市周圍部よりも低下せるは、地價と需給の關係上爾かあるべきである。けれども、之を大觀すれば、殆むど孰も左したる差額のないのは、都市の人口的膨脹の盛なる現代の趨勢として當然なる現象と謂つて可い記者は尙ほ書くべき事の多くを有つてゐるが是れだけに止めて擱く。

古代伊太利の都邑計畫

——共和時代後期、帝政時代初期の都邑計畫の特色——

山邑弘

一

共和時代の後期、帝政時代の初期に當つて、多くの伊太利都邑が創建せられたり、又は再興せられたりした。その原因と覺きは、希臘人の如く、彼等は、その狹小な地域に、人口が膨脹し過るに從ひ、その時々に可成りな一團の移民を各所に送つたことにある。その一團は一小都邑を形造るに足る程の數であつて、かうして生誕の時からして可成りの生立ちを經た新都邑が出來たのである希臘人は新しい政治的には獨立した都邑を建てたのだが、羅馬人の方法はそれと違つて、彼等を己の下に從屬せしめ、遠隔の地にある恰も羅馬領の小要塞の如き形にした。であるから時にはその植民政策が人口膨脹といふよりも軍事上の目的からなさるゝことが屢々ある。シセロがナルボ（Narbo）の植民（紀元前百十八年南ガウルに彼の時代に羅馬人口の過剩から行はれたものであらうが）を稱して『羅馬市民の植民羅馬人民の望樓（ウオッチ・タワー）ゴウル蠻族に對する堡塞』と稱してゐる。此等の言葉から見て、羅馬植民の目的の軍事的見地からなされたことの屢々あることを結論するは難くない。

更にその植民の他の理由は、羅馬共和國の衰退羅馬帝國の發生にある。サルラ（Sulla）カエザー（Caesar）、オクタピアン（Octavian）の内亂の間反對黨の巨魁等によつて、巨大な軍隊が戰場に送られたが、各戰爭の終る度び毎にその軍隊の大集團等が、直ちに解隊せられてゐた。未來の平和のた

めには、彼等が何等かの形式に於て秩序と落ち着きとを得る樣に速にせしむることが急務であつたそこで選れた方法が、その頃に普通な植民政策である。こうして過剩人口として取扱はれた滿期の兵卒等は、巨大な團體で移植されたり、時には人口の增加を要求してゐる、既設の都邑に加へられたり、又は新都邑が建てられたりしたのである。帝政時代の初期にはかうした方法は屢々用ひられた、その植民も伊太利本土のみでなく、その領土にも及ぼされた。

然らば左樣いふ都邑を伊太利に於て幾何建てられたかを決定するは容易でない　共和國の初葉中葉にかけて——凡そ紀元前百二十年に先てる期間——七十個若しくは八十個が記錄に殘されてゐるサルラ(Sulla)は十二個位を加へたと思はれる。オクタビアン(Octabian)は、その初期に當つて三十個位を建設したり、又は他の建設を援助したりした。兎に角それ等の都邑は羅馬自らの發達した具合の形式で發達したので、小さな始めから、便宜主義と機會主義によつて支配され、緩漫な成長を遂げたのである。

二

佐樣した都邑の延長と、時を同じうして、一定の型の都邑計劃に從つて、建てられた都邑がある。それ等の型は初期伊太利や希臘世界の都邑計劃と明に類似はしてゐるが、併し何れとも又違つた特色を有つてゐる。これらの都邑地域は小正方形又は小長方形をなしてゐる。二條の主道によつて街路が四部分に分かたれてゐる。そして他の道路又並行せる道路によつて　正方形又は長方形の町目(House block)に分れてゐる。此町目即ちハウスブロックをInsulaと呼んでゐる、そしてその長方形設計は幾らか幾可學的正確さをもつて完成されてある。唯東と西の北側を走る街路のみが、他の街路より屢々より大きい。二の主要な街路は卜占學と關係ある或る方位の方式に從つてゐる如く見える、概してそれ等の一は北から南に走り、他のものは東から西へ走る。時に東から西へ走る街路が、その都邑の歷史に於て重要な、或日の黎明に

於て太陽が地平線上に上るべき處のその地點を指し示してゐる如く見ゆる。

それらの都邑の公の建物は、一般に小さい上、行列的な又建築上の光彩を現はす樣に配列せようといふ樣な企が餘り見えない。それ等の公の建物は稀にはその街路を左右したり、又交叉してはゐる。空地（オープン・スペース）は餘りない。希臘のアゴラに當る公集所（Forum）は補床の廣い中庭をもつてゐるが、併しそれ等は中世紀の敎會の廻廊や又中世紀の大學の方庭の如く、四圍が建物で取り圍まれてゐる。確に劇場や圓形劇場は巨大な面積を占めてゐたに相違ないが、併し外形は裝飾的であるよりも寧ろ巨量（マッシブ）さを現してゐる。圓形劇場は屢々市の壘壁の外に建てられてゐるを見受ける。そこゝゝに凱旋門が、都邑の方へ近づいてゐる。これが唯一の建築的通景（グリース）で、それらの都邑の大抵のものでは之れ以外には左樣した建築的通景がない。

市の面積は樣々である。幼ない都邑には定則となつた面積はない。最初建てられた時には、或物は三十エーカーよりも尠しく大きい位の面積を占めてゐる。中世紀のウオルイク（Warwich）都邑の名——はその面積であつた。他の都邑はその三四倍の面積を所有してゐた。他の都邑等は十三世紀の英國に於ては餘り貧弱でもない、中世紀のオックスフオードの二倍、又は殆ど三倍の大さを持つてゐた。確かに夫等の大抵の都邑は最初の時よりも、更に大きくはなつたに相違ない、あるものは一哩四方——中世紀の倫敦の延長の二倍——迄も擴がつた同樣に町目（Hous-block-Insulae）の大さも都邑によつて違つてゐた。その一『ティムガッド』（Timgad）のそれは七十呎平方から八十呎平方に過ぎなかつた、屢々七十五ヤード平方から八十ヤード平方を示して、フロレンスやチヱリンやヤパビアやピアセンザアの町目の樣に、エーカーよりも更に大きい、稀に更に大きいものもあるが併し三エーカーを超ゆることは稀である。平均して近世の碁盤形設計よりもおちてゐる。

大抵の都邑で——凡てゞはないが——町目の面積は共通の要素を示してゐる。長さに於て、又は幅に於て、又は長さ幅双方に於て、普通百二十呎

に近いか又はその倍位になつてゐる。此の形狀は意味があるので、羅馬の土地測量の單位は即ちイウゲラム(Augerum)と稱してゐるが、百二十呎と二百四十呎の正方形の地域をなしてゐるので、町目は屢々一定の此イウゲラムと聯關しておかれてゐると見える。その分割の方法は數學的に且正確であるとは言へぬ。町目は正確にはイウゲラム、又は半イウゲラムを成してゐることは稀ではあるが、伊太利の土地測量法は伊太利以外の都邑の分明にたしかに影響してゐる。

三

此組織の特別な形狀は、正方形長方形の町目が入り交つてゐることである。プリエネ(Priene)では或町目は寧ろ他である。よりも正方形又は長方形を示してゐるが、左樣した多樣さがあるばかしでなく、そこには一定の規範がある、こゝに今取扱つてゐる。羅馬の都邑では、町目に二通りある時に町目は正方形である。時に——此形の方が寧ろ多いが——正方形に近い長方形をなしてゐる併し稀にはたとへば古い都邑ではネエプルス、後期の建設にかゝる都邑でいへばカルセエヂでは、長方形、寧ろ非常に長くて狹い長方形をなしてゐる。

左樣した樣々の形態を用ひてゐることに、如何なる原理がそこにあるのかを示すことは困難である。たしかに歷史的起原の相違が、結局その混入の原因にはなつて居らうが、その歷史的起原をこゝに現はすことは現在の知識では不可能である、グレコ、マケドニヤ風は正方形又は正方形町目になつてゐるからそこから起原したのだらうと結論すれば左樣は許されぬ。テルレマレ(Terremare)も同樣に正方形町目をなしてゐるからこゝから發したも考へられぬでもない。長い狹い長方形の起原に就て言つても初期の羅馬野營(Camp)の理論的考案が長い狹い形式になつてゐるから、そこから發したかと思へば、又紀元前第二世紀の又ウマンチナに於ける古羅馬軍團兵の野營地が矢張り同樣であるから何れとも決定し難いポムペイの一部分は長方形をなしてゐるが、他の部分は正方形か

ら成り立つてゐる。ピアチエンザア――最初紀元前百八十三年に北伊太利に建てられ、それから百五十年後に再興せられた都邑――は正方形におかれてゐるが、其同時代の隣市モデナは長方形を選んでゐる。古代ナプレスの希臘の都邑が極端な長方形型を採用してゐるかと思へば後期のアウガスタン、カルセエヂも又同様である。故に歴史的期間に於て、町目の種々な型の間に鑽い線を惹いてこれを分つは困難である。主として正方形又は正方形的長方形が採用せられてゐると見ればよい。その地方の便宜に従つて幾分違つた形式をとつてゐる處もある。カルセーヂの位置の如きは都邑の地形上、自然に狭い長方形型を採るにいたらしめた。羅馬土地測量では、明に一定の方法で正方形との間を區別してゐる。正方形をとつてゐる都邑は本來伊太利に主としてあるので羅馬領にありとすれば、それは伊太利の尺度によつて課税をうける特權を有してゐる土地に限られてある。長方形型は羅馬領で、普通の税を課せられてゐる都邑に採用せられてゐる。

羅馬の都邑計劃は、羅馬の藝術の如く、ヘレニスムの感化をうけた上それを再鑄して、そこに數學的の正確さと均齊とを現はし出したものである何時の時代にかくなつたかを決定するは困難である。或學者等は屢々アウガスタス時代として、第一の皇帝と基盤型都邑計劃とを結びつける。併し建築家ウイトルヴイウス(Vitruvius)は皇帝アウガスタスにその著書を献じ、都邑計劃に就て簡單に記した上、都邑は基盤型におかる可きものでなくして寧ろ八方型、即ち星狀とも言ひ得やうか、その型におかる可きであることを強く主張してゐる後期共和國が自發的に希臘の感化を受けて、古代伊太利の都邑計劃を加減して來たことは疑はないが、併しその感化は漸次に來たものか、又は直ちに來たものか、又はアクイレイア(Piacenza)又はピアッエンヶ(Aquileia)の如き都邑の直角型はその最初の基礎をおいた紀元前百八十年時代に屬するものであるか、又は後期に整列し直したのであるかは明でない。併しグラエコイタリアンの長方型が初期の不規則な伊太利型に代つて、それが共和國末期前には盛になつたと信ず可き理由が十分にある。

埃及旅行記 (一)

工學博士　八戸成蟲樓

緒言

江村郊邨氏の要求により埃及旅行記を書く事にしたが、餘り急なので考へてゐる暇がないから、大部分を日記帳の中から引出して左に記す。

大正十一年十月一日に白耳義國安土府解纜の大阪商船會社貨物船『アトラス』丸は、途中極めて平穩無事なる二週間の航海の後、同月十四日早朝埃西土に入港した。此船は神戸漢堡線に使用されつゝあるので、此度も漢堡を出て安土府に寄港した時に便乘したのである。客は私の他に東北大學教授の長谷部言人氏丈けで、互に名丈けは知り合つてゐたが會つたのは初めてゞあつた、併し種々の點で話があふので、私は此二週間を面白く暮した其上私の最も得意な日本語で所有用事を便じ得たのと、船長小西氏機關長龜山氏等と毎日會食したゝめ、食後いろ〳〵珍らしき話をきゝ、大に見聞を擴め常識を養成し得たから、私にとつては洵に愉快なる航海であつた。

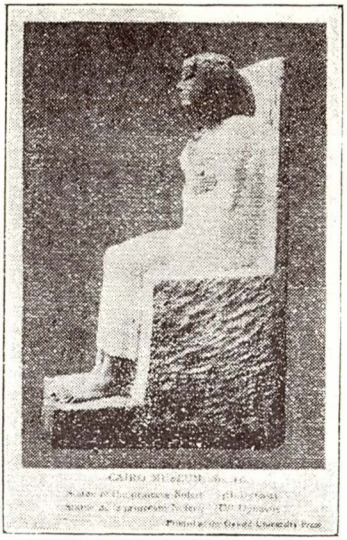
埃及入國、開路市滯在

十月十四日　（土曜、好晴）

今朝六時四十分起床、甲板に出づれば船は既に入港して正に碇泊する所であつた、八時朝食、九時商船會社代理店より出迎の艀へ船長、長谷部氏等と同乘し、序に私の手荷物四個をのせ稅關前へ上陸をした、即ち初めて亞弗利加の土地を踏んだのである。荷物は艀へ置き去りにして、同地唯一の日本商船南部商會より迎に來た土人に案內せられて、私共三人は其商店へ行つた。斷つておくが

右の土人は船長丈けを迎へに來たので、私たちは附錄としてついて行つたのであつた。

主人は南部憲一と呼び、徒手空拳渡坡してから十二年間奮闘努力、同地で成功した唯一の日本人だそうで、若い太つたおそろしく感じのいゝ人、小西船長に紹介して貰ふと直に手荷物受取の一件で大に主人を煩はした。あとできくと埃及入國の殆んど總ての日本人は皆かくの如く南部氏に厄介になるのださうである。主人こそ迷惑千萬であらうが、誰に對しても一列平等に氣持よく世話をしてくれるのださうで、當代には珍らしい人である



ラーホテップ公の妃ネフエルト座像

私は主人と共に稅關へ行つた。先刻艀の中へ殘して來た荷物は全部檢閲場の机の上にのせてあつた。こゝで暫時主人と稅關吏との問答を聽いてゐたが、暴夜語だから私には全然分らぬ、併し結句申告書の空欄へ夫れ〳〵必要事項を記入し、記名して役人へ渡すと、彼は夫れを一見した上、たゞ一個の荷物を開かせ形式的に内容に手を觸れた丈けで四個共通過、其まゝ同店へ歸ると、あとから店の使用人が車へのせて四個共運んで來た。

次に主人は船長同道領事館へ趣き、長谷部氏は番頭を案内として買物に出かけた、私は一人同店に殘つてゐたが、開路市行の汽車は午後〇時半と六時との事に、可成〇時半のに乘車せんと欲し、必要品の若干を買求め、折柄歸來の南部氏に十一月初旬孟買行汽船切符の購入を依頼し　手荷物二個を同店の倉庫へ預け、殘りの二個を持つて停車場に向ひ、豫定通りの汽車にのる事を得た。

汽車は坡西土の終點を發して暫時は蘇西運河に沿ふて走る、砂は日光を反射する事頗る強烈で、窓外をみてゐると、私の樣な視力の弱い者は、色

眼鏡なしにはぢきに眼が痛くなる、空は彌が上に青く、砂は白く、運河の水は濃厚なる群青で、早や既に熱帶氣分、埃及氣分が漂つてゐる樣に思はれた。漸くにして汽車畑中を走るに及んで色眼鏡を取り去るを得たのであつた。

正四時半開路市着、旅舘Shepherd's Hotel(牧羊舘)の乘合自働車も案内人のアーメッド、サラーも、南部氏が坡西土から打電しておいてくれたので、驛に來てゐた、サラーには明朝八時旅宿に來るべく命じ、直に宿に趣き地階の靜かな一室を占領したのは一時間後の午後五時半であつた。

埃及入國も開路の入市も、可なり手數のかゝる樣に聞いてゐたが、最早平和なる今日左程まで嚴重に取締るにも及ばずと見えて、何の取調べもなかつた。旅券は船にゐた間に、早朝乘込んで來た旅券係と事務長との間で檢閲終了せしなるべく、全然何等の面倒をも見なかつたのは、甚だ好都合であつた。

十月十五日　（日曜、好晴）

言ふ迄もなく歐米の大都市では、日曜日には官公衙商店は何れも休業し、殊に英國の田舍等に於いては、唯一の交通機關たる汽車は休止するか又は僅に一二回ほか運轉せざるが故に、私共にとつては不便至極であつたが、こゝは回敎國であるから金曜が休日で日曜は何でもない、だから土人の商店は終日、歐人のは午後一時迄營業してゐるから、恰も歐米の土曜日の如くである。博物舘も同時刻迄開舘せりとの事に、先づ第一に町の光景を見ながら徒歩で博物舘へ向つた。

同　頭　部



埃及博物舘はナイル河畔、廣濶なる地域に獨立して建てるが故に火災の虞れもなく、而も最も便

利なる位置を占めてゐる、館は一八五七年佛人埃及學者Mariette の創立するところ、現在の建築は今を距る凡二十年前、工費約五百萬フランを以て建立せしもので、頗る堅牢宏壯なるも、其式を埃及に採らずして希臘羅馬式とせしは遺憾である。

階下には多く古代の彫刻繪畫、階上には古帝國の英主の木乃伊——Ramses I,II, III, Amenophis I, Sethos I, II, Thutmosis I, II等——及寶物等の陳列で、殊に寶物は何れ劣らぬ希世の珍、我が正倉院の御物に拮抗し得るもの、世界廣しと雖も唯此寶物あるのみ、如何に英國博物館が横暮を極めても、到底此に及ぶべくもないのは蓋し當然である。

階下古代彫刻室に於いては、豫て繪でのみ見てゐて、埃及の様な國にもかゝる氣高い婦人がゐたかと思つてゐた、Ra-Hiep公の妃Nefert(又はNofert)の等身座像に初めて接し、今より五千年前の大昔に彫刻の技術が、阿弗利加の一角に於いて既に斯様な程度に迄發達してゐたかと、今更の様に感嘆之を久ふしたのであつた。

紐育の中央美術館に於いて其模造を見、實物は如何に生氣潑溂であらうかと想像をしてゐた、サッカラ發見の所謂Sheikh el-Beled(村長)の生けるが如き木彫立像も亦Nefert像と一室を隔てゝ陳列せられてあつた。惜哉兩足其他若干の部分は發見後の修繕を經たれども、全體の肉附及び温和善良なる面相は前者に劣らざる技倆の熟達を示してゐる。



所謂「村長」の木彫立像

其他クフレンの像も見逃すべからざるもの一つである。胡座してパパイラスの紙を擴げ將に筆記を初めんとする書記の像の風丰姿勢、其他無數の木彫、石刻、銅像等、一つとして觀者の注意を



胡座せる書記の緑

惹かぬものはない。

階上珍寶室に於ける古代の裝身具は、何れも善盡し美盡せるもので、一々記載をしては何冊かの書物になるであらうし、また其爲めには相當の時日を費し、仔細に研究せざれば能はぬのである、でこゝには一二圖を掲げた丈けで省略するが、私は豫てから少しく昆虫に趣味をもつてゐるので、如何なる種類の昆虫が裝飾に應用さるゝかを注意してゐたところ。古今東西を問はず最多なるは、言ふ迄もなく優美婉麗並ぶものなき鱗翅類であつた。然るにこゝで偶然Amosis の母に當る女王Aah Hotep の寶物類の中に、大蠅三疋で出來た飾があつた、蝶蛾に亞では蟬、蜻蛉其他小虫で嘗て蠅の如きものを飾りに用ひたのは見た事がなかつたが、蠅とは如何にも奇拔である、而も大した傑作でもない上に大さ三寸もあるのだから、奇異の感を起したのである。其上全部が金製である、何故斯樣な不思議なものを飾にしたのであるか。其他小蠅二疋連いだのもあつたが、但し此方は翅が銀製であつた。

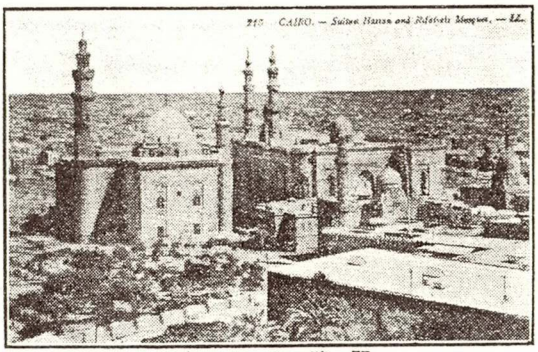
午後の閉館は朝から覺悟してゐたから、更に他日を期し一時を相圖に館を出て電車を利用して歸宿、晝食を終つてからは市内の回教寺院の二三を觀覽する事にした。

午後は Sliâria Mohammed Ali（モハメッド、アリー町）の突き當りに建てる Gâmi Sultân Hasan（ソルタン、ハサン寺）へ行つてみた、此れはハサン王の爲めに十四世紀の中葉に建立され、Herz Pasha の修理を經たる當市に於ける最美なる建築の一つである。外部から見たところは、大した裝飾もなくて古殿堂の如き莊重の感を惹起せしむ

るのである。

此寺の建立に就いては、從事した建築家が再び此以上の傑作を殘さぬ樣、寺の落成と同時にハサン王は此建築家の右腕を切斷すべき嚴命を下したといふ口碑がある。併し事實寺は王の死後二年たつて漸く落成したのださうであるから、腕切噺はうそである。

外壁は高く、壁面は窓の部分以外に左したる凹凸なきも、軒は數段に突出せる鍾乳飾を以て裝飾せられ(Stalactite Cornice)モハメッド、アリー町に面せる正面入口の意匠亦凡ならず、南側の兩竪よりは、回敎寺院に特有なる尖塔(Minatet)天に冲するも、東方のもの割合に低くして美ならず、これ一度震災の爲めに崩壞したのを、後に小規模に再建したからである。西方のものは反之、開路市回敎寺院の尖塔中最高のもので、高さ實に二百八十五呎ある、そして兩尖塔の間に圓屋根を頂けるハサン王の靈廟が方形に突出してゐる。



開路市全景
遠景よりリルタンソリ、ハサン寺及リファエイエー寺を見る

正面の入口より圓天井の玄關を通り、狹き通路を過ぐれば廣き中庭(Sahn el-Gami)に出る、中庭は大理石を敷きつめ、其中央には沐浴用噴水(Midda)があり、此中庭を中心として其四方に穹窿天井の大なる室(Liwan)がある、故に全體は十字形をなしてゐる、南側の室には半圓形の禮拜所(Kibla)と說敎壇(Minbar)とがあり、其後方が先に記したハサン王の靈廟になつてゐる。

此寺と並んでリファイエー寺(Gami Rifaiyah)がある、落成したのは一九一二年、漸く十年にほかならぬから、新しくて大に綺麗である。モハメッド、アリー町の突き當りで電車を降りると、そこが廣場になつてゐて、今記した二つの寺が並び建てる有樣は實に壯觀である。

此兩寺の間を通つて、サラヂンの廣場に出ると(Midà Saladin)に出ると、左手に小さい乍ら壁に赤白の線入のマムーヂエー寺、前にはアザブ門(Bàb el-Azab)を隔てゝ、後方高地にモハメッド、アリー寺(Gàmi Mohammed Ali)が建つてゐる。

此高地は即ち古の域砦で、一一七九年 Saladin がGizaの小ピラミッド(以下「寶形塔」と譯す)より採取した石を以て築造したのださうである。寺は君府の Sulèimaniyeh寺を摸したのださうで、寫眞でみると能く似てある。其尖塔は細く高く頗る著明にして、開路市及び其近郊よりの好目標である。現埃及王朝の始祖モハメッド、アリーが、一八二四年創建に着手し、三十三年を經て一八五七年 Said Pasha 此を落成せしめたのであるさうな。中庭も内部も左して感興を起さぬ、たゞ内部へ入つてみて一寸東羅馬式氣分を味ふ位の事である。

寺はかくの如くで、這入つてみると左程ではなく、寧ろ下から遠くに見てゐた方がいゝが、此城砦からの展望は實に絶景である。寺をみてゐる間に薄暗くなり、出た時は最早黄昏時であつたが、夫れでも無數の尖塔の建てる開路市を一目に見渡し得たのみならず、遠い〳〵雲烟模糊の間に朦朧と紫色に霞んだギザの三寶形塔の輪廓を見る事が出來たのである。初めて此等の塔は古代埃及王の墳墓であることを知つてから、正に三十餘年で例へ遠方からにせよ共俯をみたのであるから、暫くは一種の感に打たれ、たゞぼんやりと眺めてゐたのであつたが、やがて文字通り暮色蒼然三大塔を覆ふに及んで止むを得ず歸宿したのであつた。

(つゞく)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇



滿鮮紀行（一）

波江悌夫

○大連上陸

四月廿五日（晴）

滿鮮視察團一行の便乘したハルピン丸は十一時過には大連港外に到着しました、食堂を出でゝ左舷の甲板に上れば、煤煙に掩はれた商業の大都市が黄褐色の山を背景として延べられて居ります、檢疫のランチが來ます、ジャンクの一二隻靜かな海面をすべる、右舷に廻れば七八千噸の汽船四五隻が並んで居ります、埠頭倉庫の屋根と立派に出來上つて居る防波堤とを見渡して大連の初印象はさすが東洋有數の自由港たる事に異論を挾む餘地はありませんでした。

大連新聞寫眞班の要求で一同レンズの前に立ちました。多分本日の夕刊に出るのでせう。暫くして港門に進んだ船は第二埠頭に横付になります、蟻の樣に並んだ出迎者の中に岡さんや横井さんの顔を見出したのは間もない事でありました。今も忘れ得ないのは日蓮宗の信者連が一若僧を歡迎の太鼓の響であります、一行並びに出迎への諸君が

食堂に集まりますと滿洲建築協會を代表して岡理事長の歡迎の辭がありました。私は團長といふ資格で答辭を述べました。一行の視察日程は豫定の通り本日から始まるのです。一行はヤマトホテルに投宿する事になりました、會長小野木氏はホテルのホールで一行を待つて居るとの事で一行は直ちに上陸しました、埠頭事務所の脇には自働車が待つて居りました。

私は又團長の格で岡氏と一所に滿鐵本社を訪問する事になりました、川村社長は不在のために島中川兩理事始め各理事に挨拶をいたしました。

○布街見物

ヤマトホテルのホールにては小野木氏始め滿洲建築協會の各理事各委員諸君が夫々一行と初對面の挨拶が交換されました。定めし若い一行の面々を見て前田松韻先生の姿を見えぬのに失望を感じられた事でせう。私は關西方面から參加した一人として舊知の方々の多いために隨分と大きな顏をした事でせう、併し背中にはいつも冷汗の流れて居た事は今だに忘れません。

一反各定められた室に入つて手荷物を整理し或は服裝を改めました、各室は一人宛となつて居ました、私は佐藤君と二人で一番大きな三階の室を占領しました、そして此室を本部といふ事にしました。併し本部といふても別に大した事でなく凡ての打合の場合の中心の室といふ意味でした。

三時を過ぎますと支那馬車に一行は乘ることになりました。此日の案內役である此の諸理事は一人宛便乘せられたから五臺になります、馭者は鞭を上げて馬を驅ります、ホテル前の廣場から市役所前を右に大通を眞直に滿鐵本社前を通りて忠魂碑のある廣場を出て埠頭事務所に向ひました。

大連の市街は有名な放射街路系統の都市として東洋には唯一つしかない珍らしい都會であります市街といへば矩形に割られて居る內地の都會から來て見ますと多少不便な感がありまするが、大連市の價値は少なくとも此放射狀街路系統にある事と思ひました。マカダム式の車道を悠々と走る馬車の上から見物をするといふのは一行にとりては

最も好都合でした。自動車ではあまりに早過ぎます。電車ではあまりに窮屈です、内地の都會に此種の馬車があつてもよろしいと考へました。

街路には必ず歩道が設けて居ります、アカシヤポプラ、白楊の街路樹が植えられて、所々アスファルトの損所に支那人夫が手入をして居るのを見ました、白楊は一名ドロヤナギといふのださうですが丁度新芽を付けて居りました、ポプラの青々とする時分にはさぞ氣持がよい事でせう。

○埠頭事務所

大連市中で一番高い建物は埠頭事務所です。たしか七階建の鐵骨煉瓦造であります屋上に登れば四望大連の大觀を得られます。御承知の如く青窪泥時代に露國は二千萬留を投じて東洋一の大商港を建設せんとしたのださうですが今や第一第二第三の埠頭が完成せられ、一萬噸級の船が悠々横付になり鐵道にて輸送せられる鐵、石炭、豆、豆粕なんどの荷物はどん〳〵倉庫に埠頭に載積する、茲に山東省から來る數萬の苦力が器械の如く働くといふ説明を聞いて居る間に滿鐵の事業の偉大なことは數字の上よりも實際に觀察し得られます。頭を廻らせば南山の麓を廻つて青い屋根赤い屋根の住宅地が展開して居ます、西の方滿洲富士の姿は一行を迎へて笑つて居る樣です。南に延び得ない大連市は將來の運命を西に開托せねばならぬ時代になつて居るさうです。大連市の將來はむしろ招目して待つべきでありませう。

○大連名物

一行は事務所の物産陳列室で滿洲特産物と大連市の模型を拜見しました、それから又馬車に乘つて三階建の煉瓦造建物の並ぶ大通を西に市街を馳せました、電車は右側通行で一般人車は左側通行であることや。頭等並等の別あることや、日本人より支那人の姿の多い事や、支那人の物賣人の姿や、馬車の多いことや數ふれば限りもありません

一行はホテル前の廣場へ出て大山通りを日本橋へそれから露西亞町に入りました、茲の日本橋は鐵路の上に架けられて居る陸橋であります、大連

の橋は數へる程ですが皆陸橋の樣なものです、從つて大連の町に最も欲しいものは青々と柳の影を落す水の色でありませう。

露西亞町には露國時代の建物が殘つて居ります小野木氏邸も其一つであるさうです。建物より面白いのは建物を廻る塀であります、海に面し緩傾斜のある大連の町は大抵勾配を持つて居ります、從つて各住宅の周圍の塀は特別な形式を持つて居ます、私は大連名物の一と思ひました。

海岸に出た一行は茲でも大連名物の支那ジャンクを視察しました、物珍らしい一行はジャンクの內部を隈なくのぞきました、そしてそれは亦支那船頭の興味を引きました。人影がだん〳〵集まるので水上警察の巡査が之を怪しみました。査公が船を近づけました時には一行は再び馬車に上りました。

馬車に搖られて行く私は見るもの凡て珍らしいが爲めに恰も活動寫眞を見て居るかの如く感じましたが夕暮の浪花町を走る頃にはついうと〳〵と夢路を辿つて居りました。

○泰華樓

一行はホテルに歸つて一休しました。今晩は浪花町の泰華樓といふ支那料理屋で一行の歡迎會がありまず。中々呑氣に休んで居る譯には行きません。私は持參のモーニングを着けて出るといふ次第です。六時には一行皆そろふて出掛けました、樓は最近に出來た新館で玄關から直ぐにホールに通じます、此ホールは三階迄打拔きで天窓がありまず、階段は正面に在つて周圍は廻廊となつて居り各室に通じます。

久留君の說明によると支那料理やは皆此形式を保つて居るさうです、しかも此の泰華樓が二百人を收集し得る大室を有するが爲めに大宴會の客を悉く吸引して他の支那料理やを壓倒しつゝあるといふ事です。優勝劣敗は浮世の常といふ事がありますが。此六萬圓の新建物が大連料理店を動搖せしめて居る樣に支那料理は今や世界の料理界を振駭せしめて居ることは爭はれぬ事實だそうです。さて宴會場には滿洲建築協會の有力者諸君は笑顏

を以て一行を迎へられました、私はモーニングのカラーが外れかゝるのを氣にしながら正面の小野木氏の左に岡氏の前に座を占めましたと思つて下さい。卓上には所狹き迄料理が並べられてあります。老酒と日本酒とが酬められます。一行は赤くならざるを得ますまい。そして凹字形卓の周圍には滿洲の剛の者がズラリと腰を下して一行の若い者がどんな事をいふかと待つて居られると考へて下さい。私はもう冷汗が背に流れて居ますやがて岡氏の注意で小野木氏の開會の辭が始まります。一行が若い連中のみでしかも二十名に達し得なかつた事に就いては多大の遺憾を感じられたのです私は次の樣な答辭を述べました

『一體內地人は出不精な癖があります、忙がしいからでもありませう都合が惡いからでもありませう。併しこんな若い面でもまた御一興でありませう。私等は此度の御厚意に對しては唯視察した儘の所見を持參して報告すると同時にどうかして內地の人殊に老人連の尻を押して一度は滿洲の名所を見物する機に出來る丈勤める事に努力したいと考へます』

岡氏は一行の所感を順次に要求せられます、小野木氏の左右に居た一行は交る〳〵自己紹介をしました。併し氣焰が上らないといふので久留さんからエラク叱られました。だが一行は滿洲の視察に來たので氣焰を揚けに來たのでない事丈は私も申添へて置きました。宴の半に支那美人の獨唱が始まります、胡弓や蛇味線や太皷に合はして口を一杯開けて唱ふ美人の聲の大きかつた事は決して忘れる事が出來ません、歌の意味は解らんでも音樂といふものは人の感情を融和させる事丈はたしかであります。今一人の美人の獨唱が濟むと滿洲建築協會諸君の名乘りが始まります、百二十人の事ですからかなり時間がかゝりました。

酒數行料理は次から次ぎと運ばれます。宴酣にして同氏は立つて一行のために乾盃してくれました私は潛越ながら一行を代表して滿洲建築協會のために乾盃を要求しました。

宴會の終つたのは九時半頃でした。而し一行は三々五々浪花町の夜を見物しました。

紐育市步羅都記 (一)

——▲紐育市の慈善鍋▲少年裁判所▲やさしい兒供達▲音樂の敎養——

吉本時介

紐育市の慈善鍋

毎年紐育タイムス社で、クリスマス前に貧窮者救濟のために金品を募集してゐる。日曜日の新聞には一頁又は二頁全部をそのための記事に宛て、眼前の貧窮者の實情を一々簡單に記し、そのために寄附金に代ゆる目的で無報酬で執筆された、畫家の人の憐愍心を打つ樣な繪を挿入して訴へてゐる。

寄附金の額は毎年增加してゐる、人口の增加と富の增進とに伴ふ自然の現象でもあらうが、兎に角增加してゐる。試みに千九百十二年以來の統計をあげてみやう。

一九一二年……三十六万三千八十八弗
一九一三年……九十六萬四千六百三十六弗
一九一四年……百五十萬三千二百四十六弗
一九一五年……三百十八萬千九百九十二弗
一九一六年……五百五十七万九千二百四十五弗
一九一七年……六百二十一萬三百四十七弗
一九一八年……八百十萬九千七百五十七弗
一九一九年……千六十九萬六千七百十四弗
一九二〇年……千百十一萬二千六百弗
一九二一年……千二百五十萬千百十弗

右の表の示す如く十年間に千二百十三萬八千二十二弗の增加になつてゐる。而して右の金品は紐育タイムス社並に『紐育貧民狀態改善協會』『紐育州慈善扶助協會』『慈善組織協會』『ブルウクリン慈善局』『カソリック慈善』『猶太人博愛補助聯盟』の重な慈善團體が取扱つてある。

訴へられてゐる困窮者の實情の中一々讀んで行

くと興味尠くない。その中の三四をこゝに記して見やう。

件二十八(Case28)

家庭ありしことなし

モウリスの母は彼の面倒を見る丈けの力がない彼の父は彼の生きてゐることを知らない。モウリスは今三歳。然し非常に内氣で羞しがりである。何故ならば話すにほんに嗤く位しか話せぬ、此事が他の小供の笑の種になる、その聲帶が病的狀態にあるので、これは取除くことが出來る。彼は善き家庭とはどういふものか、何を好み、何を愛す可きかを全く知らぬが、彼は品のある人の心を惹く兒供である。善い注意と善い養育してくれる家庭があれば非常によく進歩しよう。

必要金額　二百弗

州慈善扶助協會より（東二十二街百五番地電話グラマーシイ千百五十四）より報告されし件、

右の樣な形式で一々の件が彫しく上げられてゐる。尙ほ之を記してみやう。

件九十八

アンナ、五十八歳。曾て結婚せしことなし、而して多年その母本年八十六歳なるを扶助し來る。近頃アンナ殆ど全く盲目となりしため、前の職業を捨て、新に袋物の製作を覺えし時惡しく、その賣れ行き善からず、時間と投資した幾弗かを浪費した形となつた、紐育市盲目協會は彼女に毛布を織ることを敎へつゝある故に、それより尠しの收入を得るに到らう。併しその貯蓄は今全く皆無となり、今は僅少の助にて辛うじて生活をつゞけてゐる。

必要金額　四百八十弗

件十一

近隣のある婦人等が、毎日々々缺かさず、共同家屋の玄關先の階段に坐つて釘衙へ、その餓じさを防ぐために帶を強くしめなほしてゐる五歳の女兒マリオンは興味を持ち出した。そして彼女の父は死し、母は毎日洗濯屋に働きに行き、年上の四人の兄姉等は學校に行くため、マリオン一人が朝の八時より學校ひけ迄一人でのこされてゐることを知つた。そして母は彼女に特に大きなパンの二



アックスの父

子との間に取代はさるゝ様な調子で訊問應答がすゝむのである。

今はその大きな第一室の光景から始めバトリックの毆打罪『シュルツハイマー』と法廷の役人が呼ぶと、九歳位の早熟らしい小さな男兒が、丸肩の澁面をした、皺だらけにみえる面をしたその父親と共に現れる。それに續いて他の同歳位の小供が現れる。



ナイフをふるつた短氣者伊太利人

これが被告バトリックである。裁判官は彼等を一列に並ばせて、さて罪名を『毆打爭鬪』とよみ上げる。父に質問する。猶太語が口をついてほとばしる。通譯者が呼ばれる、甚だよくない被告バトリックが、石炭の破片で原告マックスの前額を打つたのである。裁判官は父親の雄辯を制し乍らマックスに向ひ、どうして左樣いふことになつたかと尋ねる。バトリックはその間反抗の氣味を示す。マックスは彼がその父の質店の前で遊んでゐた處、バトリックが石炭の破片を取上げて投げつけたことを流暢に述べる。『どうして左樣なつたのか』『何もしないのに……』と答へる。裁判官はバトリックに向ひ『何故左樣いふことをしたのだ』バトリックは、突然に怒り、半ば叫ぶ樣に『私のおつかさんを尻といつたから』『併しお前はあれをつかまへてゐたではないか、何故、拳をつかはなかつたのか』『私は左樣したのですが逃げだした上あれのお父親さんが又私のお母さんを尻といひましたか

片を與へる迄餓じさを我慢さしてゐる母は一週十四弗で働き、餘り人の助けを求むることを好まず彼女等の小供等の頬が青くなる迄は我慢をしてゐた、小供等は學校に通學し、身成りも小奇麗にしてゐる。尤もその子供の一人のズボンは米國合衆國の地圖の樣になる迄繼ぎだらけではあるが。

右の外十二歳の小供一人の働が辛じて一家を支へてゐるもの、紐育市で生れ一家ユダヤのエルサレムに移り、ミシンでその小供の一人が或女兒と相愛したるも彼の十四歳の時、成長の後再び迎へに來ると約束して紐育市に歸り、二十幾歳かとなつて彼はその約束を實行するためエレサレムに向ひそして彼女と婚したが恰も世界大戰突發したため紐育市に歸るを得ず、通譯として働き、大戰後一男一女を携へ紐育市に歸つたが、間もなく夫大病に罹り、困窮の淵に沈んでゐるといふのや、又歐洲から言語も通ぜず、知邊もなく、尠しく先きに渡米した知つた男に、家族の許を得て結婚のため紐育市に着し、結婚後既にその男に妻子あるを知つたが、これが此國の習慣と言ひ聞かされて止むなくそのまゝに過し、二人の子供をあげた後捨てられて困つてゐるのや樣々の社會事相が寫し出されてゐる。

少年裁判所

少年裁判所を見たことがある。建物も內部の空氣も別に裁判所らしくない、普通の家と違はぬ人をいやに威嚇する樣な惡い印象はない。來た時は朝の十時に間があつて開廷せず、小供等の幾人、みすぼらしい姿をした大人男女、小供等の關係者であらう、幾人や、家の外にも心配さうな顏をした小供等が立つてゐた。今雜誌の記事をこきませて裁判の模樣を記してみやう。

假りにトミーといふ子供が大きな裁判室に、ガウンを着用してゐる裁判官の前に進み出るとする若しその子供が前に曾て此裁判廷へ來て、執行猶豫中であるに、更に犯罪行爲があつたとか、何か又他の面倒なことを仕出かしたとすれば、彼は他の小室に行かねばならぬ。そこには普通の卓子の背後に事務服を着用した裁判官が坐つてゐて、一切の裁判所にある樣な形式の手續を略して、父と

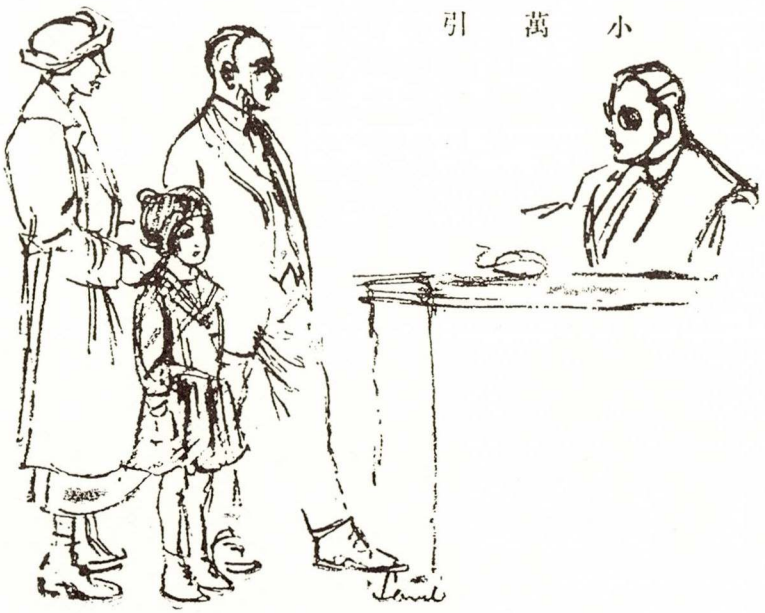
ら』

そでこ裁判官が怒つて物を投ぐることの危ないことを說き聞かせる。此間マックスは腹癒せ的に微笑して居る。併し數分間で今度はマックスの方へお鉢が廻つて誹謗と言葉の人を傷けることを言ひ聞かせる。父も又同樣である。此うして此事件は却下される。

併しこうした輕い面倒ばかしでない。更に重大な犯罪を持つて來る。學校で少年がペンナイフで切つたとか、學校から下げらるゝが厭さに少女が自殺を計つたとか、ネグロの少年が友達の打ち處が惡くて死に到らしめたとかいふのが來る。

少　萬　引

第二件はサード、マヴェニユの小さな店が告訴して來た萬引の件である。大きな眼の美しい七歲位の少女がそれである。少女は彼女のみすぼらしい成りをしてゐる母親と並び、會得が行かぬといふ面持をして裁判官を見上げてゐる。その間にその店の代表者といふが、彼女が取つて彼女の袋の中へ入れたといふ短い靴下とハンカチイフとを取



小　萬　引

り出して見せた。裁判官はその娘に二三の質問をしてから母親に向ひ嚴しい調子で小供の健康のみでなく、その道德上にも注意する母親の義務と特權とを說き聞した。而して後娘は父親の友人等に渡され、母親は『監督不行屆』の件で大人の法廷にまわされた。

次は虛僞に火事警鐘を鳴らし僞つて學校を休み遊んだといふジョンニーの件、理發相な面持をした小供が現れる。左樣した行爲から如何なる面倒が生じ、市がそのために一度毎に五十弗若しくはそれ以上の損失をするかゞ說明して聞かされる。次に學校を休むのよからざることを聞かされる、學校の成蹟は善い方であるから、裁判官は嚴重な調子で學校へ正式に行くことを約束させる。彼が此裁判官へ導かれる前、左樣した行爲に何か肉體的又は心的缺陷はないかを試驗される、若しあれば裁判なく直に病院又は學校へ送られるのである

冒險者ジム

次の件が呼ばれる。ジムがその室に現れると、それに伴なつて頭からシオールをかむつたスウエデンの婦人が現れる。ジムは八才である。母親はそのジムが手におへず、とても監督がし切れぬからほり出してしまひたいと訴へる。ジムは柔和で非常に活々して見える併しジムは時々家庭から逃走することゝ此間も八日八晩何處におるとも分らず家を出た切り歸らぬことを訴へる。



冒險家ハロルド

『何處へ行つたのだ』と裁判官が尋ねる

『公園の向うの方です』

『何をしてゐたのだ』

『遊び廻つてゐました

『獨りでか』

『左樣です』

『何處で寢た』

『一晩は軒下でその他は地下室です』

『盜んで食べてゐたのか』

『さうじやない』と怒つた面持で答へる。『金を儲



五十才の男と駈落の娘

けたのです。人が椅子や物を家に運んでゐるのを見つけたから、助けて五十仙貰ひました』

『それで何を買つた』

『フランクフウルター』

『それ丈けか』

『左樣です。一は朝食に一は晝に一は夕方食べました』

『それ丈けでは三四日過せる丈けでないか、それから何をした』

『どうしてゞす。私は又その樣な他の仕事を見つけて働いたのです』

此八歳の子供の立派な勇氣が紐育市を震撼させた。裁判官は此少年の學校成蹟を電話で調べさせる。結果唯數回缺席した外すぐれて良好なことが分つた。少年は學校の友達とその遊びを好まぬ。いつも一人で遊んでゐる。裁判官は此件を如何に決定してよいか一寸當惑の體に見えたが、遂に少年に大きくなつてから遊び廻りたければ、今學校で必要な知識を必らず得ておかなければならぬことをなつとくさせ、兎に角兒童は學校に行かねばならぬ規則があるから、これに背く者は罰せらるゝと說き聞かせて歸らせた。

これが終ると狼狽喧騷の聲が聞こえる。八歳から十六歳位迄の子供が一列に並ぶ彼等はブロンクス街の一隊で人の家の壁を形のない迄にチヨオルクでいたずらをし、惡い遊びをしたいといふ件で訴へられたのである。裁判官は一人々々の姓名を讀み上げる　最後の最も小さい子供に來ると彼の聲の調子が嚴しくなる。

『お前は前にこゝに來たことがあるね、アイキイ』

『左樣でございます』

『前と同じ面倒で來たのだね。あの時にいつたでないか、クラツブスを遊んで二度と此處へ來ればその時は罰すると。よろしいお前はこゝに暫く居るがよい』

鼻すゝり、嗚咽、號泣、

併し裁判官は堅くとつて聞かず、アイキイは兒童協會で二三日過す可く拉つし去られた。他の少年は嚴しく戒められて釋放。

次は十五歳の典型的の奇麗なフラッパー（おかつぱ）。その母親が駈落の件で拉して來る。五十歳の男子と逃げたのである。偶然のことから居所を發見して强て連れて歸つたといふのである。

こうして終日、伊太利人、アイルランド人、ポーランド人、ユダヤ人、純粹の米國人等の子供等が入り代りやつて來る。

かうして彼等は警官に耳をひつぱられて警察署に連れ行かれ大人の犯罪者と同一にせらるゝことを免がれてゐる。

やさしい兒供たち

日本では食べるものは大概食つてゐる。小鳥などでも手近かに居れば取つて食ふ。背に腹は代へられぬといふ諺は、いかにも好く事の眞相を數言で現してゐる名句である今更ら感心する、米國では背に腹は代へられぬ現象はあつても、日本のそれとは甚しい違をなしてゐる。兎に角土地の廣漠とした、幾ら耕しても耕し盡せぬ程に廣い、天産のゆたかな國である。こうしたこともその原因の一にはなつてゐやうが、一體に小鳥などもおつとりとしてゐる。そばに近寄ると逃げることは逃げるが、日本の小鳥の樣に神經質にあたふたと人の足音を聞いて飛び上るのとは違ふ。比較的におつとりしてゐる。公園に行つても、自分の今居るプリンストンの校庭にしても、栗鼠が人を恐れずに廻つてゐる。子供等が周圍に居ないのかといへば左樣でもない。子供等に一體に動物愛護の念が吹き込まれてゐるので、捕へ樣と飛んで行つたり、石を投げ附けたりする者がない。隨つて動物の方でも人を恐れないものと見える。

子供等も一體にやさしく、むかうの方から人なつつこく挨拶をする。一體に體格が立派であるに拘らず、その割合に惡戲が烈しくない。日本の子供等が西洋人位の體力をもつて居る子供は亂暴で手におへぬ樣子である。その體力にまかせてひどい活動をする。日本人の子供は體力の割合に氣が勝ち過てゐる。

米國では道路の廣い關係もあらうが、婦人が立派に自動車を操縱してゐる。併しそれは左樣した原因ばかしでなくして、一體に科學上の實際的な

知識が普及してゐる。子供等の遊びでも靴に小さな車輪をつけて、スケートの様に道路を走り廻つたり、小さな車に乘つて遊んだりしてゐる、一體に機械や交通の知識が發達してゐる。

兎に角日本人は一體に體格の割合に氣が勝ち過てゐる。體格がその氣に伴ふ様に、更に住居の改善や運動の奬勵が必要であらう。

音樂の敎養

前との關係から見ると、木に竹をついだ様な、いろ〳〵の事柄を書くが、これが雜記の特色であるからそのつもりで讀んで頂きたい、こゝに報道する事柄は四五の事實を引用して、米國文明若しくは西洋文明の特質を歸納し、若しくは演繹したり、又はそれを日本文明と比較して論ずる様な讀者に手つとり早く米國國狀の中心を理解させる様な遣り方ではなくして散漫な事實の報道ではあるが、併し反つてこれによつて公平に國狀の幾分を理解することも出來やう。尤も自分の記す方面は或一部に限られてゐるからで、實際はこれでもつて米國の中心に觸れ得ることは又不可能ではあるが、併し幾分の世相の一般を知り得、又讀者の興味を惹き得ると信ずる。

餘計なことを書いたが、さて『音樂の敎養』といふ題だから尠しくそれに就いて記すため忙がねばならぬ。

プリンストン大學にエルヤハーバードにも音樂科がある——音樂科がある。別に他の科の様に定つた組織立つたものでもない、生徒を入學させてこれを敎育する組織があるのでもないが、專任敎授がいて、大學內の音樂の指導をやつてゐる、

日曜禮拜のチヤペルの唱歌隊を訓練したり、生徒等がやつてゐるオーケストラや、その他の音樂の指導をやつてゐる。

昨年末から四月迄每週一回づゝ、音樂の講義をしてゐるが、此講義には生徒はかしでなく、大學外の人々も自由　聽講に來られる様になつてゐるそこで講義さる、音樂の說明のために、生徒等がピアノの演奏をやつたり歌つたりしてゐるが、ピアノ獨奏などは實に立派な手際で、彼等の敎養の程が思はれる。（つゞく）

自然を背景とした住宅

某實業家夫人　小百合

口私はいつもさう考へてゐるので御座いますよ小高い丘の上にこうしぶみのあるむかしの伊太利風の家か何かを建てましてね、——それは必ずしも西洋風とはきまつてゐません、日本の古びた田舎家でもよろしいので御座いますが——其片側の方は種種の樹木を澤山植えて、森のなかの氣分にし、春から夏は花が咲ゐたり、新緑の香が漂ひ秋から冬になれば紅葉したり、また病葉迄が散りつくして仕舞ひますと、木枯しが吹きつけましたり雪が積つたりする美しい情景が眺められ、片側の窓からは芝生をへだてた向ふの方を　大きな川がゆるやかに流れ、時々筏や帆掛舟が通る！そんな南畫にでもありますやうな風景の處へ住んで好きな本をよんだり、窓へよつて外の景色を眺め、絶えず美しい空想を描き乍ら暮してゆけたら、どんなに私は樂しい事だろうと思ひますの。いゝえ單調でもいゝのです、そこには世間の煩しさも何もないので御座いますもの、だけれどそれはおそらく實現のされない生涯を通じての私の空想で御座いませうね。私がそんな夢みたいな事を描ゐて、それが樂しい事であると思うてゐましても、それをほんとうの幸福であるとは誰が保證し得ませう。生存してゐます以上、其美しいと思ふ生活にも又種々のなやみもわざわい起ります事でせうけれど

口私はこれでも割合に建築だの裝飾といふものには興味をもつてあるので御座いますよ。ですから、今打出の方へたてゝゐます家も、なるべく自分の理想に近いものにしたいと種々苦心したので御座いますが、主人や其他のものゝ意見なども御座いますから、とても私の思ふ通りには出來ませ

んですが、でも主人もさう云ふ方には可成理解力ももつてゐますし、他の方々の意志も出來る丈尊重しまして、少しでもわがおもふ方へ近づかうと考へたので御座いますけれど　ほんとうを云へば、私共夫婦の家なんで御座いますから設計などでも全く私どもに任せておいて下されば、どんなにか嬉しい事と思ふのて御座いますが……それでも私共は決してわるい樣には致しませんものね、……（これは夫人が非常に氣むづかしいといふお姑さんの側にゐられるので今度の建築などにも隨分心を痛められた樣子ですが多分その事を暗にいつておられるのだらうと思ひます。）私は表面華やかに見える人間の裏面で味ふ悲哀の一入ふかい事をしみ〴〵感じました。

その悲しみはいつでも自分のゆくところには何處にでもつきまとふてくる樣で御座います。

□それでも家は洋風にする事は出來ました。じみな英國風の落着いたもので——私はさう考へてゐます——極小さなものでは御座いますが、御承知の通りあそこは山と海と同時に眺め得られる地で御座いますから。それに鬱蒼とした森林の氣分はとても味はふべきすべも御座いませんけれど、裏手の方から横手へかけて、種々の樹木を植えたので御座います。私の思ふ川はありませんけれど海で我慢をいたします。私としましては、それでも滿足しなければならないと思ふてゐるので御座います。

□家の內部をすつかり洋式にします事は、只今の私どもではどうしても許しませんので、階下は玄關をのぞく外殆んど日本風にしてあるので御座います。他所樣では大てい二階へ日本間をとつてゐられる樣で御座いますが、私の家では山手なので二階の方が海も山もよく眺められますから、客室も寢室も居間も皆二階にしたので御座います。私はあの階上とか階下とか區切のつくのが何だかいやな氣分がいたしましてね、出來る丈そんた感じのしない樣にしたいものと思ひます。ですから私は平家にすればいゝと思つたので御座いますが二階のないのは不格好だとか、不經濟だとか申しまして……そんな意味で階段の巾も割合に廣うい

たしまして、少しづゝ曲つて昇る様にしたので御座います、さあどんなものになりますか。

□女といふものは何程藝術への憧れをもつてゐましても、結婚をしましてはやはり主婦なので御座いますから、自由々々と申しましても、一人ものゝ様には參らないと思ひます。私のお友達の方でも社交だの何會だのといつて、殆んど毎日出かけられてゐらつしやる方もありますけれど、私はやはり家の事を主として考へ臺所の進歩などはかる方がほんとうではないかと思ひます。さうして其他に主人の仕事をたすけたり、又は趣味をもつと云ふ事は全く其人々の技倆ではないでせうか。私はさう考へてゐるので御座いますが……私は私の働く臺所をどうして便利にそして完全にしようかと随分考てみましたけれど、なか〳〵いゝ考へも出ませんでしてね、それで臺處は風通しのよいと思ふ處へ六疊敷に致しまして、他の部屋より一段低く致しました。これは只臺所と他の室との區別をはつきりつけたいと思ひましたゞけで、深い考へもありません。食料品や食器棚などをぐるりにとりつけた他あまりあちこちしない様にと炊事場や洗場や其他のものを一ところにまとめました、食料や食器の棚にはカーテンも簡單で夏向きなどよろしゆう御座いますが、あれでは埃がかゝつたり何か致しますから矢張スリ硝子か普通の戸がいゝと存じます、夏はどうせ冷藏庫とか、其他のものへ入れますのですからもつと狭くても用はたりるので御座いますけれど、あんまりお臺所の狭いのは何ですか窮屈な感じがすると思ひまして……私は出來る事なら女中も何もつかわないですつかり一人でしてみたいとも思ふので御座いますが、そんな理にも參りませんので……何事にもまだほんとうに經驗がないので御座いますから、追々と教へていたゞいたり自分でも考へてみたいと思つてゐます、時々むかう(打出)の建築場へ參りまして實地をみてはゐますが、全く出來上つて道具なんか置いてみないとどんなになるか分らないようで御座います。

□あなた、濱寺の向ふの伽羅橋住宅といふのを御存じでいらつしやいますか？櫻ケ丘の博覽會の

家にくらべましては平地と丘との相違もありいくらかみとりがする樣で御座いますが、あの可成廣い野の中に處々赤瓦のアメリカ風の家の屋根が見えますのは、一寸よう御座いますね、私あそこに知人が御座いまして一二度參つた事がありますのですが、文化生活とやらで簡單には出來てゐる樣で御座います。ですが私はあのアメリカのコッテージ式のものはハイカラで明るい感じはいたしますが輕薄な氣がいたしまして、どうしても好きにはなれないので御座いますよ。もつとも一概には申せませんで御座いますがね、櫻ケ丘にも私好きだと思ふ家が二つ三つ御座いますけれど、いくら樹木が植つてゐるにしましても、あんなにたてこんでゐましては、初めて訪ねていつたものなどまごつくでせうし、それにあそこへすつかり人が住ふ樣になりましたら賑やかでは御座いませうが、こせ〳〵するような事はないでせうか、それにあの家は博覽會の出品であると云ふからでも御座いませうが專門家の方々の熟練された技巧など充分うかゞはれますが、もし私どもが住むとなればどう云ふ感じが致しますでせうか。

口家などゝ云ふものはあまり凝りすぎますとかへつておかしなものになるのではないでせうか。あまり氣にもとめずボンヤリとした考へでももつてゐますとひよつとしてこれはと思ふものが出來るかも知れませんね、さう度々たてる事の出來ない家をたてるので御座いますから、まさか、そんなにボンヤリともしておられないでせうが庭などでも、草花を綺麗に植えたり、あまり人工的なのは私何故ですか好きませんので、家の周圍にもきたなくない範圍に、たとへば芒の樣な丈のながいものや、雜草など特に秋草を深く植えたいと思ひます。春の花はパッとして美しゆうは御座いますけれど、秋の花のように清楚と云ふところが御座いませんもの。

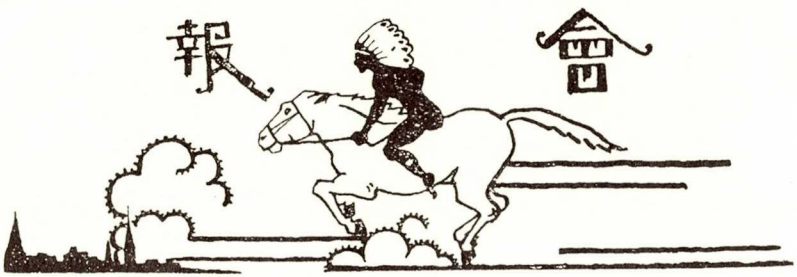
口私は自然の風景は、なるだけ〳〵失いたくないと思ひまして、又身體の健康抔の事を考へ少々不便でとや角の批難もありましたなれど、少し山を昇つた、餘りたくさん家のない地を撰んだので御座います。さう云ふ地でなければ、とても自然

とか、風景とか云ふものは得られないので御座います。都會で繁瑣な仕事にたづさわつてゐるものには殊にさう云ふ休養地が必要であろうと思ひます。いくら便利だとか賑やかだとか申しましても都會生活はほんとうにいやなもので御座います。何のうるほひものびやかさもない、殊に大阪あたりの様な煤煙の多い樹木の少い都で住むのは生活に對してある程度迄の悲慘といふ事はまぬがれない事だと思ひます。都會の眞ン中でのどれ程立派な住ひでありましても、郊外の不便な處の小さい家にくらべましては、いかに茅屋でも田園の生活の方がはるかにすぐれてゐると私は思ふので御座います。街に店をもつておりましては、どうする事も出來ませんが、住ひ丈はどうしても、風光明眉とまではゆかなくとも、空氣の澄んだ郊外へもつてゆき度いもので御座います。

　口それから、私はもう一つ始終そう思つております事は、從來の便所で御座います。此頃では洋館がふえるにつれて洗ながしの便所もあちこちで用ひてゐる様で御座いますが、あの臭氣がお座敷へ迄も通してくるのは全くたまりませんのね。私共日本人は割合に氣にしない様ですけれど、第一衞生上に惡いでは御座いませんか。大阪の市内に接續しております町に建つてゐます長屋風の家なんか、便所が並んでゐるのか、住宅がならむでゐるのか一寸分らない位の小さなものが、たくさん建ちならむでゐますが、便所の中に住んでゐる様で御座いますね、夏なんか定め不愉快な事だらうと思はれますが、あんなのはどうにか、他に方法のないもので御座いませうか、私はいつもさう思ふんで御座いますよ、ですから私どもでも特に便所の設置場所を考へまして、無論洗ひながしの式では御座いますが湯殿と並行して少し住ひよりつき出しだので御座います。早く出來上つてくれゝばと、ゆく事をほんとうに樂しんでおります。

　もつと〳〵藝術味のある住宅についてのお話しをしようと思つておりましたのにこんなつまらない話に時間を費しまして、あちらが出來ましたらせひいらして下さいませ。又何か變つたお話でも御座いませうから。

日本建築協會々報



會報

○會務

一、去る六月三日執行の春季大會に付ては會員賛助員各位より多大なる寄附金を辱し且有益なる講演の勞を賜り洵に感謝に堪へざる次第なり

當日講演會には聽衆七百餘名を算し晩餐會には名譽賛助員四名新聞記者其他十名會員賛助員壹百〇九名計百二十三名の出席者ありて近來稀なる盛會なりき春季大會委員及各係員各位の多大なる御骨折を深謝する處なり

一、五月例會に議題となりし普通賛助員賛助費增額の件は都合に依り延期することとなりたり

一、交涉團体府友會は今回會員十五名增加し全員三十三名となりたり

一、技術者聯合大會本協會委員として左の三氏を選定依囑し承諾を得たり

横濱勉氏、野呂長四郎氏、園部文雄氏

一、理事（主記）內藤太郎氏今回渡歐に付役員辭任の爲六月例會理事一名補闕選擧の結果會員宮本長治氏當選したり

會合

○春季大會委員會

△日　時　五月二十二日午後五時卅分—九時

△會　場　本協會々議室

△出席者　委員長宗氏、委員福永氏舟橋氏、中村氏、佐藤氏、山脇氏、呼子氏、大林氏、西谷（書記）

△議　事　一、大會諸準備に付具體的細密なる事項に付協議決定せり

1、料理に關する件
2、餘興に關する件
3、徽章に關する件
4、速記者に關する件
5、講演場の準備の件
6、入場券に關する件
7、各係員補助員の件
其他種々協議す

○春季大會委員及係員打合會

△日　時　六月一日午後五時三十分—九時

△會　場　大洋軒中食堂
△出席者　委員長宗　氏委員福永氏、舟橋氏、佐藤氏、宮本金氏、中村琢氏、久保田氏、山脇氏、宮本長氏
係員井上氏、八木氏、平塚氏、小林氏、瀧氏、下浦氏、鈴木氏、今林氏、須川氏阪井氏
△記　事　一、宗委員長より春季大會擧行に付一場の挨拶を述べ各委員及係員名簿を配付し尚同委員長より今日迄の準備其他に付説明をなし夫れより諸般の打合せをなす
1、各係長として左の諸氏を選定す
會場係長　横濱　勉氏
講演係長　宮本　金七氏
食堂係長　大林賢四郎氏
庶務係長　福永佐和吉氏
會計係長　舟橋　喜一氏
2、尚餘興係として左の諸氏に依囑す
横濱委員　大林委員、鈴木甫氏、今林彦太郎氏、谷口廉兒氏
3、會場係の件
4、庶務係の件
5、其他準備に付協定する處ありたり

○春季大會通俗建築大講演會

△日　時　六月三日午後一時―五時卅分
△會　場　大阪市中央公會堂大集會室
△記　事　一、本日は天氣晴朗にして初夏とはいへ室内の氣濕中和にして最も講演會に適す會場の諸準備整ひ定刻午後一時となるや宗委員長司會の下に池田理事長開會の辭を述べ講演を開始し左の順序に休憩時間もなく一氣呵成に拍手の裡に講演を了れり

講演順序

司會者　春季大會委員長　工學士　宗　兵藏君
開會の辭　日本建築協會理事長　工學士　池田　貫君
和風住宅と洋風住宅の長短　大阪府技師　工學士　中村琢次郎君
滿鮮視察土産　片岡建築事務所　工學士　波江悌夫君
忘れられたる住宅の半面　都市計畫大阪地方委員會技師　農學士　大屋靈城君
超過度期　横濱建築事務所長　工學士　横濱　勉君
照明の話　大阪電球會社技師長　工學士　大島弘義君
家相に對する疑問　葛野建築事務所長　工學士　葛野壯一郎君
アパートメントハウスに就て　京都帝國大學教授　工學博士　武田五一君
建築界の大勢　片岡建築事務所長　工學博士　片岡　安君
閉會の辭　大會委員長　工學士　宗　兵藏君

一、當日聽講者無慮七百餘名を算し稀なる盛會裡に無事散會したり時に午後五時三十分なり

○春季大會晩餐會

△日　時　六月三日午後六時―十時卅分
△會　場　大阪市中央公會堂大食堂
△出席者　名譽賛助員
今西林三郎氏、渡邊千代三郎氏、山口房五郎氏、湯淺豊太郎氏
各新聞記者
大阪日日新聞社、日本建材新聞社、大阪新日報社、工業新聞社、文化時報社、東洋建築材料商報社、工業之日本社
講演者及寄附者
大島弘義氏、大屋靈城氏、前田仲右衛門氏
終身賛助員
池田勘藏、橋本料左衛門、德政金吾、上

瀧、辨吉田中讓、田中英詰、辰巳吉之助
中川辰藏、久保田種吉。山本辰五郎、山
添繁藏、駒井喜兵衛。森下新造、須賀豊
治郎、須賀藤五郎、安藤組大阪出張所、
布袋惣平諸氏

會員其他

井上貢、井上勘二、今林彦太郎、池田實
橋本舜介、林榮松、林田瀧次郎、原科準
平、本多二郎、戸塚端、大倉三郎、大須
賀嚴、小川安一郎、置鰭章、岡部顯則、
渡部義三、片岡安、河村茂、葛野壯一郎
吉木久吉、呼子正、横濱勉、田島長二郎
谷民藏、谷口賑兒、武田五一、武田經一
瀧村松之助、瀧邦一、宗兵藏、園部文雄
長尾繁治、中川廣、長澤榮作、中川彌八
中原英一、中村琢次郎、中島智喜、村井
季四郎、野呂長四郎、久保田小三郎、久
保田繁亮、山脇友三郎、山本潔、山田元
治、八木幸次郎、山崎孝麿、松田茂樹、松
村次郎、前內文次郎、舟橋喜一、藤村愛
資、藤田友太郎、福永佐和吉、小林喜多
次郎、兒玉廣太郎、小西一良、小林悉、小
島淳吉、朝永國太郎、佐藤彰美、佐々木
岩太郎、阪井米吉、木原駒作、宮本金七
宮本長治、宮崎治三吉、設樂貞雄、設樂
貞三、篠崎兼二、下浦光衛、平塚鎗吉、疋
田貞三、森篤次郎、森定松之祐、瀨戸文吾、
須川廉太郎、鈴木甫、菅谷一郎、佐野謹
三、村上義一、澁谷五郎、中川將、波江
悌夫、岡本茂樹、岡田平藏、小林三藏、
小林辰三郎、森本藤吉、清水榮治、增山
新平、河合貞一郎諸氏

協會職員

西谷節、山田靜吾、清川伊佐、越山達

△記　事　一、定刻午後六時來賓會員其他
一同食堂に入り卓を圍み着席直に晩餐を
共にす宴酣にして片岡副會頭立つて一場
の挨拶を述べ次いで名譽贊助員今西林三
郎氏來賓を代表して祝辭を述べ一同立つ
て祝盃を擧げ協會の隆盛發展を祝福す
一、餘興として大阪大和屋小女連の歌劇
星の光、勢獅子、の二幕を演じ大に興を添
へ一同快談縱橫各自歡を盡し十時を過ぎ
散會す

○理事會

△日　時　六月十二日午後五時卅分―十時
△會　場　本協々議室
△出席者　池田、舟橋、野呂、設樂、宮本、園
部、西谷、（書記）
△議　事　一、事務所縮少に關する件
二、不用物品賣却に關する件
三、普通贊助員贊助費增額並名譽贊助員
推選に付通信決議に關する件
四、技術者聯合大會に於て各團體委員會
常置に付本協會委員選定に關する件
五、六月例會に關する件
六、內藤理事辭任に付補闕選擧に關する
件
七、編輯に關する件
八、職員出張旅費に關する件
九、職員上半期賞與に關する件
十、會員銓衡

○例　會

△日　時　六月二十二日午後六時半
△會　場　大江ビルヂィング大廣間
△出席者　講演者大須賀巖氏
副會頭片岡安、理事長池田實、理事野呂
長四郎、理事宮本金七、理事園部文雄
會員　大原芳知、小西一良、本村清、中
澤誠一郎、池田谷久吉、高田利一郎、森
本藤吉、宮本長治、平木鐵治、森篤次郎
山口榮作、林兼松、長澤榮作、横濱勉、中

島三郎、小寺源一、樋口辰太郎、加藤善吉、小池光義、吉田健治、竹中最一、長野金太郎、橋本舜介、中村吉太郎、山本久吉、岡本茂樹、平井二郎、小川安一郎原科準平諸氏（計廿四名）

普通賛助員山添繁蔵、林田瀧次郎（計弐名）

合計参拾六名

△記事　一、池内理事長の紹介を以て先づ講演を開始し、豫報の通り、都市計畫大阪地方委員會幹事法學士大須賀巖氏の「社會と家」と題する講演ありき、氏特得の最も砕けたる調子と雄辯を以て、約一時間餘りに亘り、遺憾なく手のものとて最も有益な講演ありたり。畢つて池田理事長より、更らに例會を開く旨を告げ、内藤理事外遊の爲辭任により生じたる理事の補缺選舉を執行す

一、右投票を了りて、理事長は出席者中より小川、小池兩氏を開票立會人に指名兩氏の立會を以て開票に着手せしがその結果は左の通りなり

一、投票總數　参拾壹票

一宮本　長治氏　貳拾参票

一波江　悌夫氏　参　票

一大原　芳知氏　貳　票

一安井　武雄氏　壹　票

一横濱　勉氏　壹　票

白　票　一　票

一、上記の結果宮本長治氏理事に當選、池田理事長より同氏を紹介、滿場拍手を以て迎ふ。

一、次いで、現大阪府知事、同内務部長、同警察部長、同産業部長な日本建築協會名譽賛助員に推薦の件を諮り、滿場一致を以て可決。

一、但し右は當日の出席者規定決議數に足らざるを以て、更らに通信決議によるべき旨を諮り可決。

一、畢つて、關部主記より、春季大會の狀況、各月例會に於て可決せし普通賛助員會數增額の件延期、技術者大會へ参同せし件、既成交渉團體の件、新入會員現在會員數等の會務報告あり。

一、以上にて一先づ本日の例會を畢り、池田理事長より閉會の挨拶ありて散會せり

○住所移轉

小松　靜君　大阪市西區靱町四丁目十二番地

後藤　信勝君　大阪府下東成郡天王寺村阿部野七二ノ二

片岡　勇夫君　大阪府下西成郡神津村小島二一九

地福　勇吉君　鹿兒島市舟津町福屋旅館内

佐藤　松治君　府下東成郡田邊町南田邊一三六

菱田　厚介君　東京市外西大久保四三五

横田　作藏君　東京府下西巢鴨堀ノ内一一八

小田垣清造君　東京市牛込區西五軒町七

糸永　文古君　大阪北區東野田町五丁目東京建鐵株式會社内

坂本　義信君　安東七番通三丁目鎭江旅館内

弓削鹿次郎君　東京市牛込區矢來町三番地

守谷　茂君　宇山里十四號

大阪市東區備後町貳丁目野村建築場内

西川　啓三君　福井縣敦賀郡栗野村第十六師團經理部敦賀派出所

山口卯太郎君　神戸市兵庫菅原通一ノ一六

濱崎　定吉君　大阪市東區小橋西ノ丁一番地ノ十五

野村　理一君　兵庫縣川邊郡伊丹植松町

伊藤　重雄君　福岡市地行東町四番町一一二

竹村　近衛君　東京市外巣鴨町貳ノ五

野瀬　錄郎君　大阪府下豊能郡豊中村宇櫻塚九七二

桑名康太郎君　富山市清水町二〇六

籠田　定憲君　大連市山縣通大倉ビルデング日本土木株式會社大連出張所内

竹平　孫一君　兵庫縣川邊郡伊丹町清水町二一ノ一

平井　三郎君　大阪府下天王寺村天王寺長池五一一

○退會者

（普通賛助員）池永垣男君

○新入會員

（會員）吉田龍郎君、樋口辰太郎君、中島春次君、加藤誠二君、北村萬治君、藤本賢太郎君、北垣熊之介君、平木鐵治君

（地方會員）福井義長君

（特別賛助員）岩本勝君、仙田丈一君

（普通賛助員）高濱利道君、秋田喜代治君、本島正男君、野村勇君、高橋君三君

○寄贈圖書

庭園五號　同協會
住宅六、號　住宅改良會
建築雜誌五號　建築學會
材木新聞每號　同社
金屬工業新聞每號　同社
經濟資料六號　東亞經濟調査會
都市公論六號　都市研究會
土木建築六號　住宅改良會
建築世界六號　同社
工業評論五號　工業評論社
帝國鐵道協會々報五號　同協會
建築畫報六號　同社
國民經濟雜誌六號　寶文館
通俗衛生五號　大阪府衛生同學會
電氣學會雜誌六號　同學會
工業の友六號　工手學校
滿洲建築協會雜誌五號　同協會
建築の普及六號　帝國工業教育會
建築業協會月報六號　建築業協會
新住宅六號　洪洋社
電氣評論六號　電氣評論社
大阪市商工時報五號　市役所商工課
工業之日本六號　工業之日本社
名古屋工業會々報五號　同會
會報五號　大阪工業會
都人第二光　都人社
住宅研究六號　文化建築社
活人七號　同社
工政會々報每號　工政會

役員及職員

副會頭　片岡　安
理事　池田　實（理事長）
理事　本田　登
理事　竹腰　健三
理事　内藤　太郎（主計）
理事　設樂　貞雄（編輯）
理事　野呂長四郎（編輯）
理事　宮本　金七（編輯）
理事　舟橋　喜一（主計）

理事　佐藤　彰美
理事　園部　文雄

職員

江村　郊郁
西谷　節
山田　靜吾
清川　伊佐
編輯　伊藤二世子

臨時博覽會部（住宅改造博覽會）

會長　片岡　安
幹事長　鹽野　壯一
常務幹事　波江　悌夫
常務幹事　小笠原　錦吉
幹事　木本　禹久
幹事　松本　象一
幹事　舟橋　喜一
幹事　瀨戸　文吾
幹事　西谷　節
書記　山田　靜吾
書記

會員	二七六	會員（地方）	九六
名譽贊助員	六七	終身贊助員	五〇三
特別贊助員	二八	普通贊助員	四九八
合計（六月廿五日現在）			一〇二五

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

（毎月壹回一日發行）

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
	特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ	

大正十二年六月廿五日印刷
大正十二年七月一日發行

發行兼編輯人　大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一　江村恒一
兼印刷人　大阪市東區内淡路町一丁目廿一番地　大阪活版所
印刷所　大阪市北區絹笠町九　大江ビルヂング三十七號室　日本建築協會
發行所　電話北四二九一番　振替口座大阪三九九七五　大阪市西區京町堀羽子板橋北　柳々堂書店
特約販賣店　電話（土佐堀一四四〇番）　振替口座一〇八四番

●第六集第七号　掲載広告一覧（掲載順）

内外木工所
島田硝子製造所
内田商事
佐倉金庫店
阿部鉄工所
瀧山商店
南満鉱業
日本ペイント製造
文化工業
石綿スレート
吉岡商店
日本建材工業
高谷商店
大林組
山本東作商店
奥村重兵衛商店
服部禎商店

石川工業所
神藤ポンプ製造
大福海上火災保険
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
片岡松井建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所

柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
舟橋建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
葵商会
池田勘蔵
日本土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店

長瀬組
中新
佐伯工務所
野村亥之助
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一
鴻池組営業所
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
有山組
辰巳吉之助
清水組大阪支店
森本建築社
銭高組
清水福太郎

大阪青写真調製所
伊藤常太郎商店
伊藤健三商店
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
高島屋呉服店
コルク工業
高田商会
須賀商会
内外土木建築材料
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
川崎工場
砂崎
大野式特許品営業所
東京建鉄

河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
三越呉服店
日本木材工芸
都市工業
大理石工業
ベニス工房
作田工務所
鈴木製作所
城口汚水処理研究所大阪支店
米本栄商店
田中タイリング商会
浜口商店
日本トラスコン鋼材
大阪耐火リノリウム工業
日本ホロタイル
岩崎商業
日本工剤

小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
岡部商会
黒宮建築事務所
木下商店
下里商店
大分セメント
山下商会
田中昌司商店
二和商会
日本洋瓦大阪出張所
政正
今井徳太郎商店
東京電気
桐田商会
大阪窯業
旭硝子
日米板硝子
別府ステインド硝子製作所

中松組
梅原組
関西ステインド硝子製作所
山中商会
HANKEN SEISAKUSYO
森川組
金剛商会大阪支店
特許エレベーター製作所
筑紫商会
積善館
今井硝子店
横河橋梁製作所
田中源太郎商店
極東板硝子工業
